

ハイデガー哲学と国民社会主義

奥 谷 浩 一

要 旨

世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが、二〇世紀をつうじて最も残忍な政治体制のひとつであった国民社会主義、すなわちナチズムに深く関与したことが今なおハイデガー・ナチズム問題として激しい論争的となっている。こうした論争状況は二一世紀においてもなお当分の間続くことであろう。

これまでハイデガーは、神学から哲学へと転向して以来、もっぱらアカデミズムの世界のなかでのみ生活し、一九三三年四月にフライブルク大学学長に選出されてすぐナチに入党するまでは、政治の世界とは直接的な接点をもたなかったと見なされてきた。しかし、一九二七年に出版されて彼の名声を高めた『存在と時間』は、見方を変えれば、彼の政治思想または政治哲学の形而上学的な表現として理解される。なぜかと言えば、『存在と時間』においては、「現存在」としての人間のうちに「存在」の本質を探究するという枠組みのなかで、退屈な日常世界のなかへと頹落して個性と冒険心を失い、「存在」を忘却した平均的人間が批判的に分析されている。そして、人が「死へと向かう存在」であることに由来する「不安」や「恐怖」をつきつめることによって「本来性」への「決断」が求められており、こうした分析は明らかに、当時のワイマール体制に比定される抑圧的な社会からの解放という政治的目標を背景にもっている。こうした政治的含意があったからこそ、ハイデガーは一九三三年にナチズムによって開始された保守革命を、新たな「勃興」として、「時代の夜明け」として、感激をもって自らのうちに同化することができたのである。

本稿では、こうした視点から、『存在と時間』後のハイデガーがナチズムに関与していく過程を彼の思想の発展の必然的なプロセスと見なし、このプロセスを①彼の学長時代以前、②学長時代、③学長辞任後からドイツ敗戦まで、④第二次世界大戦後の四つに区分しながら、それぞれの時代のハイデガー哲学とナチズムの関わりの程度と特質を明らかにすることにしたい。

キーワード：国民社会主義、ニヒリズムとその克服、民主主義と近代技術の批判、倫理的無能

第一章 ハイデガー・ナチズム論争の新しい次元

世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが、いわゆるナチス、すなわち国民社会主義ドイツ労働者党（正式名称）が政権を奪取したナチ革命の年である一九三三年四月にフライブルク大学

学長に選出され、その直後の五月一日（メーデー改称「国民的労働の日」）を期してナチに入党したのだが、その後一年もたたないうちにこの学長職を辞任したことは、我が国においても比較的よく知られていた事実である。しかし、ハイデガーがどの程度ナチズムに関与したのか、そして学長職辞任後のハイデガーとナチとの関係はどうであったのかについては、これまで一般にはあまり知られず、まして我が国においてはハイデガー研究者にさえもほとんど知られてはいなかった。今から四十年近く前に哲学科の学生であった私たちは、例えば東京大学教授であった原佑氏がハイデガーの『存在と時間』の解説のなかで「しかしハイデガーの総長在職は、所定の一カ年も満たさず終わった。それどころか、在職期間も終わりに近づくにつれ、やがてハイデガーの心のうちにはナチスへの批判的反省が芽生えてきたように思われる」⁽¹⁾と解説されたことを暗黙のうちに了解し、こうした解説にいささかも疑念をいだくことがなかった。私たちのこうした了解のうちには、ハイデガーといえども、哲学者にありがちなように、政治と世事の世界に疎いという傾向をまぬがれることができず、あのナチの勃興の時代にその正体を見抜くことなく、大学学長として否応なしに政治の世界に巻き込まれ、一時期はこれに協力したが、しかし、やがてその凶悪な本質に気づいて最終的にはこれと袂を分かったのだ、ということが含まれていた。

こうした私たちの了解がまったくの先入見であったことを豊富な資料と証拠によってはっきりと解明したのが、チリ出身の哲学者ヴィクトル・ファリアスであった。ファリアスは一八八七年にフランス語で『ハイデガーとナチズム』を出版して、ハイデガーが一九三三年のナチ入党時から一九四五年のドイツ敗戦にいたるまでナチ黨員であり続け、党費をも滞納することなく払い続けていたことを示しただけではなくて、ハイデガーのギムナジウム時代の諸論文を発掘してその思想形成史に新たな照明をあてたし、ナチ時代のハイデガーの講演や大学内外の政治的活動などについて多くの資料を提供した⁽²⁾。そして、翌年にはドイツの歴史学者フーゴ・オットが、ファリアスとは相対的に独自の道をたどり、またフライブルク在住という利点を生かして、ハイデガー学長時代の学長室と大学評議会などの文書や書簡など、これまで一般には知られていなかった多くの資料をもとに、『マルティン・ハイデガー—伝記への途上で』を刊行した。このファリアスとオットの先駆的な仕事がわれわれに突きつけた多くの歴史的諸事実は、ハイデガーとナチズムとの関係がこれまで考えられていたように決して一時的・偶然的なものではなくて、きわめて根深く、持続的なものであったことをあますところなく立証し、そしてハイデガーのナチ関与が彼の哲学思想と深く内的に関係していることを改めて示して、世界中に大きな衝撃を与えた。これらの仕事に先立つ業績として、グイド・シュネーベルガーがナチ時代のハイデガーの講演・論文・新聞などへの寄稿、そしてハイデガーの言動を伝える新聞雑誌の記事などを丹念に集めた『ハイデガー拾遺』がある⁽³⁾ことを忘れてはならないが、ファリアスとオットの仕事はこれを継承し発展させたものである。

ハイデガーとナチズムの関係にかんする最初の論争は、すでに第二次世界大戦後のフランス

とドイツで闘わされていたが、ファリアスとオットの問題提起は、この論争に再び新しい角度から点火し、この論争をいっそう高い新たな次元へと引き上げるものであった。ファリアスとオットが巻き起こしたセンセーションは、フランスでまたしても激しい論争を引き起こし、そしてドイツとアメリカ合衆国へと波及していった⁽⁴⁾。我が国においても、先のファリアスの著書『ハイデガーとナチズム』（山本尤訳、名古屋大学出版会、一九九〇年）として邦訳出版された後、わずか一月あまりで第二刷が増刷されたことに示されるように、ハイデガー・ナチズム問題は、欧米におけるように表立ったかたちはとらなかったとしても識者のあいだに静かに浸透したといえることができよう。この問題がハイデガー研究者の間にもそれなりの反響を呼んでいることは、木田元氏の諸著作にも見ることができる⁽⁵⁾。我が国では、時間が経過するにつれて、アカデミーの世界よりもマスコミにおいても大きな反響が見られたことが特徴的であった。例えば、NHKは一九九五年にE T V特集で「我が友ハイデッガーはナチ党员だった」を二度にわたって放映したし、一九九九年にも同じ特集「知の巨人たち・ハイデガー」のなかでハイデガーとナチズムとの関わりを取り上げたこともわれわれの記憶に新しい。そして、ファリアスとオットによって強く触発されたこの論争の過程のなかで、後年著名な政治哲学者となったユダヤ人女性ハンナ・アーレントが、マールブルク大学でハイデガーの講義を聴講した一九二五年以来、ハイデガーと恋愛関係にあったことがエティンガーによって詳細に明らかにされた⁽⁶⁾ことも、私たちにとってはきわめてショッキングな出来事であった。それは、この出来事がたんに倫理的問題を孕んでいたからだけではなく、後年反ユダヤ主義を掲げてホロコーストの政策を実行した政党の一員となり、ひとつの大学の学長として一時期ではあれラディカルなナチとして活動することができた人物が何故に後にホロコーストの対象となるユダヤ人女性とそのような関係を結ぶことができたのかは、通常の市民感覚からすれば理解に苦しむことだからである。

ともあれ、ファリアスとオットによってハイデガー・ナチズムの問題が改めて提起されて、ハイデガーとナチズムとのかかわりをめぐる論争が新しい次元で再び熱い議論の焦点となって早くも二〇年が経過した。この間、世界的な規模でこの問題にかんするさまざまな研究書が現れて以前とは様相を一変し、これまで陽の目を見ることがなかった多くの資料が発掘され、またかつては知られていなかった多くの事実が解明されている。こうした論争の結果、ハイデガー哲学の崇拜者を含めて多くの心ある人々にとって今や否定することができなくなっているのは、ハイデガーとナチズムとのかかわりが決して一時的・偶然的ではなくて、これまで考えられていたよりもはるかに強く根深いものであり、彼の名声を高めた『存在と時間』以後の彼の思想の発展を考慮すると、ハイデガーの思想にはナチズムを受け入れる必然性があったのではないかということである。ハイデガーが『存在と時間』のなかで展開された自らの思想にもとづき、当時急速に勃興しつつあったナチズムをドイツ民族の再生、世間的な日常性・平均性からの脱却とその克服のための起爆剤と見なし、ナチズムによる保守革命が新しい時代の開闢を

もたらず絶好の歴史的「カイロス（好機）」であるとの確信をもってこれに関与したことは、文書・講演記録・書簡などの資料から見る限り、現在ではこれをすべて否定することはきわめて困難であろう。

しかし、これらの努力にもかかわらず、世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが二〇世紀最大の蛮行のひとつと言うべきナチズムに何故に関与することができたのか、その思想的な動機と背景は何であったのか、哲学者の思想と行動とが普通の場合とはっきりと切り離すことができないほど密接に関連しているとすれば、ハイデガーは自らの思想のいかなる部分を根拠としてナチズムに向けて出撃しえたのかという諸問題の核心は、まだ完全に解明しつくされたわけではない。これらは現在もなお、ハイデガー・ナチズム問題として、熱い哲学的な議論の対象となり続けている。そして、もしも『存在と時間』以降のハイデガーの哲学がナチズムと不可分に結びついているとするならば、彼の哲学とナチズムとの内的関連という視点から彼のその後の哲学が理解されなければ、その哲学思想を十分に理解したとはいえないであろうし、その哲学の解釈も片手落ちということになるであろう。そして、とりわけこうした視点からは当然のことながら、ハイデガーの哲学と思想全体にたいしてこれまでの評価に一定の見直しを加えて再評価するという作業も行われなければならないということになるであろう。現在、ハイデガー・ナチズム論争の新しい次元が要求しているのは、まさしくこうした一連の諸課題なのである。

第二章 ハイデガーのナチズムへの接近過程

ここで、ハイデガー・ナチズムにかんするこれまでの研究成果に照らして、ハイデガーとナチズムの関わりについて、本論文を読むさいの予備知識として簡単に素描してみよう。

マルティン・ハイデガーの思想について語る場合、彼が生い立ち、彼を育ててきた南ドイツの精神的・宗教的土壌を抜きにすることはできない。もともとカトリックの勢力が強かった南ドイツではあるが、一八七〇年に教皇の無謬性の教義をめぐる、これを支持するカトリックとこれに反対する旧カトリックとの分裂と闘争が政治状況とも絡んで長く影を落としていたほかに、カトリックの民衆のレベルでは中世以来反ユダヤ主義が広くまた深く根を下ろしていたことを考慮する必要がある。

マルティン・ハイデガーは一八八九年にドイツのバーデン州メスキルヒに生まれた。同郷の有名人には、貧しい境遇から身を起こしてカトリックの高名な説教師となり、オーストリアの宮廷説教師にまで昇りつめたアブラハム・ア・ザンクタ・クララがいる。彼は当時広く影響を及ぼした雄弁家・文章家であったが、名うての反ユダヤ主義者でもあった。マルティンの父はメスキルヒの桶職人頭を務め、同時にカトリック教会の堂守をもしていた。マルティンはその社会的境遇からすれば本来大学に進学できる状況にはなかったが、カトリック司祭の推挙

によって奨学金を得ることで、コンスタンツとフライブルクのギムナジウムをへて、フライブルク大学神学部に進むことができた。学生時代のハイデガーが書いた書評のなかにすでに「近代主義の破壊的な影響」⁽⁷⁾という言葉が見られるが、西欧の物質文明・合理主義または知性主義・文化的価値に反対するこの反近代主義的立場は、ハイデガーが生涯にわたって抱き続けたものであった。彼が受けたカトリックからの援助、住んでいた学寮や寄宿学校、奨学金、父の希望などの関係からすれば、彼は卒業後はカトリック司祭になることが当然視され、また実際奨学金受給の条件としてそのことが義務づけられていたが、学位論文で「心理主義における判断論」を書き、教授資格論文で「ドンス・スコトゥスの範疇論と意義論」を書いて⁽⁸⁾、リッケルトやフッサールに依拠しながら中世論理学と心理学を研究するという哲学的手法に関心を移しつつあったハイデガーは、フライブルク大学神学部の私講師を務めながら、第一次世界大戦後の一九一九年になってから初めてカトリック教会と神学から離反してプロテスタントに宗旨変えをすることになる。

この離反の背景には、彼が空席になっていたフライブルク大学神学部教授に就くことができず、カトリックと距離を取ることで同大学哲学部に就職するチャンスをより確実にしようという意図があったと推測されること、また当時カトリック内部で近代主義をめぐる深刻な対立があり、教皇ピウス十世が求めた反近代主義の強権的路線に対する反感からハイデガーにはカトリックの思想体系が懐疑されるようになっていったこと、そして彼はユンカー出身でプロイセン陸軍の高級将校の娘でプロテスタントのルター派に属していたエルフリーデ・ベトリと結婚したが、この新婦が当初カトリックに改宗する意志を示しながらついに改宗しなかったことなどがあげられる。後年権力を掌握したナチスは当初は宗教的寛容をポーズとして示し、カトリックとの間に「コンコルダート（政教条約）」を結んだにもかかわらず、次第にカトリックの勢力と敵対し、これを抑圧するようになっていった。したがって、後に反カトリックがナチズムの政治的スローガンとなるのだが、上記のような事情から、カトリックから離反したハイデガーはナチズムのイデオロギー上の構成条件のひとつを満たしたことになる。言い方を換えれば、ハイデガーは自らが生まれ育ったカトリックの信仰を放棄したことで、ナチへと接近する途上で障害となって立ち足らざるをえないもののひとつをいわば自らの手で掃き清めたのである。

ところでハイデガーは、フッサールの文部省にたいする特別の申し出が受理されてフライブルク大学で彼の助手をも務めることになったのだが、一九二三年にまたしてもフッサールの強い推薦でマールブルク大学哲学部員外教授の候補者となった。彼はこの招聘に応えようとして、十一年間の沈黙を破って一九二七年二月に『存在と時間』の前半部分をフッサール編集の『現象学年報』に公表した。『存在と時間』は、「存在」そのものと存在物とを区別し、人間を現存在と規定することで、基礎的存在論として、つまり存在そのものの意味と真理を人間という現存在の分析によって、最終的には時間性として了解しようと試みる視点から書かれている。そ

れは一方では、解釈学的現象学的手法によって行われた人間、すなわち現存在の分析のなかで、自らの有限性を自覚した本来的な人間存在に対比させながら、一般人が平均的・没個性的・人性的な「世人」へと頹落し、空談・好奇心・曖昧さ・頹落・被投性のうちにある非本来的なあり方を鋭くえぐり出し、「死への先駆」・不安・恐怖・倦怠などの諸概念を手がかりとして、決意性に支えられて日常性から脱却することを呼びかけたのであった。この実存論的な思想は、人類史上初の世界大戦を経験してこれまでの西欧文明の破産とよるべなさを体験したヨーロッパの知識人たちの精神的状況を映し出していただけでなくて、他方では、「存在」そのものを忘却して存在物しか対象となしえなできた西洋のすべての哲学と存在論の歴史を丸ごと否定する破壊的で戦闘的な姿勢をもっていたために、ただちに世間の圧倒的な注目を集め、ハイデガーはきわめて短時日のうちに世界的な名声を手にする事となった。この注目すべき著作は実際には前半だけの未完の書に終わったのだが、それが勝ち得た大きな評判のゆえに、ハイデガーは同時にマールブルク大学正教授の地位をも獲得し、そしてその翌年の十月にはフッサールの後任として古巣のフライブルク大学に招聘されたのであった。

それでは、「存在」を思索する哲学者ハイデガーと人類史上最も残忍な政治体制のひとつであったナチズムとの結びつきは何ゆえに、またどのようにして生じたのであろうか。

いわゆるナチス（国民社会主義ドイツ労働者党）は、「ドイツ労働者党」を母体とし、第一次世界大戦敗北直後のドイツ革命、ヴェルサイユ条約受諾による多額の国家賠償、そして戦後の加速度的なインフレなどの極度の政治的・経済的混乱のさなか、当初はわずか五〇名足らずで結成されたラディカルな右翼的・国粹的政党であった。その特徴としてあげられるのはまず、「労働者党」の党名から了解されるように、労働者の不満を吸収する疑似社会主義を標榜するところにあり、さらに、第一次大戦におけるドイツの敗北の責任は軍にあるのではなくて社会民主党を初めとする社会主義勢力による軍への「背後からの一撃」にあるとする誤った認識（いわゆる「七首伝説」）のうえに立ち、ワイマール共和国を裏切り者によって成立した国家として徹底的に糾弾するところにあった。しかし、他の政党と異なるその独自性は狂信的な反ユダヤ主義とドイツ民族主義と反共産主義との独特な結合であった。つまり、ワイマール体制に具現される議会制民主主義、資本主義的搾取と拝金思想、ソ連共産主義とマルクス主義、国際主義など、彼らが打倒の対象とするすべての体制と傾向をユダヤ人の世界支配の陰謀から発生するものと見なし、ユダヤ民族から公民権をはじめとする権利を剥奪してドイツの国家公民から排除しようとしたのである。そして、その活動の中核をなした疑似軍事的組織である突撃隊（SA）による街頭での過激な直接行動と暴力的なテロ活動もまたその大きな特徴をなしていた。

ナチスは、一九二三年のミュンヘン一揆失敗後に党首アドルフ・ヒトラーが獄中で書いたとされる『我が闘争』が多くの読者を集めたことで次第に世間に知られるようになったが、その後しばらくはたんなる弱小政党にすぎなかった。例えば、ナチスは一九二八年五月の帝国議会選挙では得票率二・八％、十二議席を占めただけであった。しかし、一九二九年に入ってニュー

ヨーク・ウォール街の株の大暴落に始まる世界的な金融恐慌が発生し、そのあおりを受けた実質賃金の切り下げによる生活水準の低下、最大時二五%を超える失業率の急増などの社会不安と社会体制に対する不満を背景に、ナチスは地方議会でその勢力を急速に伸張して注目を集め始めた。当時世界で最も民主的とされたワイマール共和国はその足下から大きく揺らぎ始めていた。ナチ党は、一九三〇年九月の同選挙では一〇七議席を獲得して一躍議会で第二の勢力をもつ巨大な政党にのし上がり、敗戦後のヴェルサイユ体制を打破するとともにこれによって苦境を強いられたドイツを再建しようとする保守勢力と愛国的・民族主義的運動の希望の星となった。そして、一九三二年七月に帝国議会選挙では二〇三議席を獲得して第一党に躍進し、翌一九三三年一月には大統領ヒンデンプルクがヒトラーを帝国宰相に任命した。ここにいたってナチスはいよいよ政権を掌握して、その野望を達成したのであった。その直後から社会民主党と共産党の政治集会や選挙運動に対する暴力的な弾圧が開始され、二月二七日に共産党委員長テールマンが「反ファシズム闘争同盟」の結成を呼びかけたその夜、何者かが仕掛けた国会議事堂放火事件を口実に、テールマンと大量の共産党員の逮捕が行われた。

しかし、こうした弾圧にもかかわらず、三月五日の帝国議会選挙ではナチスと国家国民党の連立政権は六四九議席中三四〇議席、つまりおよそ五二%の議席を獲得したにとどまり、社会民主党が一二〇議席、共産党も八一議席を獲得して健闘したことは注目に値する。それだからこそ、これに対してヒトラーは共産党の議席を強制的に剥奪し、その後はいわゆる「全権委任法」で憲法と国会とを事実上形骸化して首相と政府に権力を集中させ、また「強制的同質化のための暫定的法」を定めて、州議会のレベルにおいても議会制と社会民主党を含む反または非ナチ勢力を一掃して、「強制的同質化」、すなわちナチ党指導部の主導と任命のもとでの体制の再編成が行われた。こうした全国的なナチ化の過程はまさしくファシヨ的暴挙という仕方で進行したのである。歴史学者の見方では、この過程は「それぞれの地方の突撃隊・親衛隊による『下から』のテロと、中央政府（内相）による『上から』の国家全権委員任命とをかみあわせたクーデタ方式で貫徹された。」⁽⁹⁾

ナチの私設監獄には弾圧された犠牲者があふれかえっていたが、三月末にはミュンヘン郊外のダッハウに最初の強制収容所が設置され、このことはナチの機関紙『フォルキッシェ・ベオバハター』で大々的に報道された。さらに、四月七日には「公務員再建法」が公布されて、国家公務員から社会民主党・共産党員およびマルクス主義者などの公務員不適格者を排除するとともに、非アーリア系、すなわちユダヤ系の人物を免職することが合法化された。三月から五月にかけて労働組合の事務所も突撃隊・親衛隊によって暴力的に占拠されて労働組合は解体し、七月にはナチ党以外のすべての政党が解散へと追い込まれた。ドイツ全国に吹き荒れたこうした嵐のような血なまぐさい過程を経て、ナチ国家はやがて過酷な反ユダヤ人政策へと突き進み、そして来るべき第二次世界大戦を準備することになる。

こうした社会情勢にハイデガーはどう反応していたのであろうか。

ハイデガーは『存在と時間』の前半を上宰した後で、彼が予告していた本来第三部となるはずの部分「時間と存在」として、前半とは逆の道をたどって後半は時間性から「存在」に照明を当てるはずであったが、その構想は挫折した⁽¹⁰⁾。彼はこうした思想的な苦闘のなかで「転回」にいたる道を模索しつつあった。この模索の過程のなかで、嵐のように進行する社会情勢がハイデガーとその一家に与えた影響は想像するに難くない。ハイデガーの思索は、国政選挙におけるナチスの躍進を背景にし、これと呼応しながら歩み続けたと考えられる。

ハイデガー家では、プロイセン陸軍大佐の娘であるハイデガーの妻エルフリーデが早くからヒトラー崇拝者であったと伝えられている。ハイデガーもまたこうした家庭環境のなかで次第にナチ党が標榜する保守革命に共鳴するようになっていったと推測される。哲学者エルンスト・カッシーラー夫人トーニの証言によれば、一九二九年には「ハイデガーの反ユダヤ主義的傾向も私たちの間ではよく知られていた」⁽¹¹⁾し、ヘルマン・メルヘンもまた一九三一年の大晦日にトートナウベルクにあるハイデガーの山荘を訪問した時、ハイデガー家の全員がナチズム、つまり国民社会主義に改宗しているのを知ってびっくりしたと証言している⁽¹²⁾。

哲学者であるハイデガーの場合、ナチ党にたいする彼の接近と関与は彼なりの政治哲学と歴史哲学にある程度支えられて進行したに相違ない。ハイデガーのこの歩みは『存在と時間』でアウトラインを描かれた哲学的理論と決して無関係ではありえなかったと考えられる。言い換えればハイデガーは、一見すると政治には無関係であるかに見える『存在と時間』の実存論的な理論的枠組みを基盤とし、そこで展開された実存論的に抽象化された概念と思想をさらに発展させようとして模索する過程のなかで、閃光のごとく登場したナチズムと出会い、これに触発され、彼の理論的枠組みを現実社会のなかで具体化し体現するものとしてこれを受け入れ、そのうえで政治的なナチ革命へと「出撃」しえたと考えられるのである。

ハイデガーがナチズムへと接近しつつある徴候を最初に示していると思なされるのは、一九二九年から一九三〇年にかけての冬学期で行われたハイデガーの講義「形而上学の根本諸概念」である。この講義では、第一次大戦と第二次世界大戦との間のいわゆる戦間期に『西洋の没落』を著したシュペングラーの時代の診断を踏まえ、またとりわけニーチェの思想に依拠しながら、例えば「われわれの今日の現存在の根本気分としてのある規定された深い退屈」が分析されている。ハイデガーによれば、現在の時代を覆っている「深い退屈」はわれわれが空虚のうちに放置されていることに由来するが、その空虚とは「欠如・不足・困窮としての空虚」にはかならない。彼はこう述べている。「いたるところに、もろもろの動揺、危機、破局、困窮がある。すなわち、今日の社会的貧困、政治的混乱、学問の無力、芸術の空洞化、哲学の基盤喪失、宗教の無力がある。確かに困窮はいたるところにある。」⁽¹³⁾この困窮は、全体的で本質的な困窮に由来し、われわれの現存在のうちに秘密が欠けていて、したがってどんな秘密にも伴っているはずの内的な驚愕、現存在にその偉大さを与える内的な驚愕が不在であることに由来する⁽¹⁴⁾。そして、「危険のないところでの全般的な満腹した安楽」が至るところに、つまり「結局のと

ころ組織作りや綱領作成や実地訓練などのすべて」のうちにある⁽¹⁵⁾。ハイデガーによれば、時代を覆う全体的な深い退屈と困窮の存在によって呼び求められているのは、現存在の「自己封鎖解除」と「決断」にはかならない。「世界大戦というような出来事も本質的なことにおいてはわれわれのそばを跡形もなく通り過ぎてしまった」⁽¹⁶⁾ ことを見るならば、この「自己封鎖解除」と「決断」とは、「今日の普通人と俗物」がなしえないこと、すなわち人間のあれこれの理想を追求したり、偶像にしがみつ়くことではなくて、「人間の内なる現存在を自由に解放すること」によって初めて成し遂げられる。この自由な解放は、言い換えれば、「自分のためにまさにまず再び独自の可能性を戦い取って、そのような可能性のうちで自らを引き受けなければならない」⁽¹⁷⁾ のであり、「人間におのれの最も独自の重荷としての現存在を背負わせる」ことである⁽¹⁸⁾。

ハイデガーによるこうした時代の診断には、社会的な困窮と閉塞状況のなかでの既成の政治組織への不信、秘密・驚愕・危険に対する賭けの不在と安全圏内での飽食安逸に対する告発が示されているばかりか、こうした閉塞状況を作り出している凡俗で規格どおりの人間が嫌悪され、これを突破するものとしてニーチェ的な英雄主義が称揚されている。こうした叙述には明らかに、『存在と時間』で展開された思想の枠組みを継承しながらも、この抽象的・一般的であった思想の枠組みに当時の社会状況とのかかわりでいっそう具体的な形象を与え、そしてこうした社会状況を何らかのかたちで突破しようと模索する姿勢が伺える。

ところで、ハイデガーとヘーゲルの研究者として知られるオットー・ペックラーもまた、一九二九年のニーチェ研究がハイデガーにとってはナチズムへと接近するひとつの大きな転機になったのではないかとし、自らの解釈をこう述べている。「ハイデガーにとってはニーチェからヒトラーへと至る道があったのではないか？ハイデガーは一九二九年以来ニーチェと共に、偉大な創造者たちの創造行為をつうじて悲劇的な世界経験を、そして歴史的な偉大さを復活させ、そうすることでギリシャ人の思考の開始を、そして神話によって包み込まれた地平を変化したかたちでドイツ人のもとへと取り戻そうと試みたのではないか？」⁽¹⁹⁾ しかし、この時期にハイデガーがナチズムに向かってたどった道を考察する場合、彼がニーチェ研究に加えて、初期のナチズムの興隆に大きな影響を及ぼした作家エルンスト・ユンガーを研究し、これから大きな影響を受けたことをも見逃す訳にはいかない。ハイデガーが後に、一九三〇年に彼の助手を務めていたヴェルナー・ブロックと共に小さなサークルで、『労働者』という著作の要約版とも言うべき「総動員」という論説を研究し議論したと述懐している通りである⁽²⁰⁾。ユンガーは、第一次世界大戦の塹壕戦に参加した戦場体験から、戦闘と破壊のなかで発揮される兵士の男性的精神を賛美し、これをブルジョア的頹廢に対置した。そして、近代的戦争を「総力戦」、すなわち戦争へと向けて国民と科学技術を全面的に動員して闘う全面戦争として特徴付け、その担い手を十分に組織された「労働者＝兵士」として位置づけたうえで、ドイツの労働者の武装を呼びかけた。こうした全体主義的な労働者国家への呼びかけが「国民社会主義ド

イツ労働者党」の政治的含意に呼応していることは明らかである。その後まもなくハイデガーは、ユンガーが敷き、突撃隊が採用した労働者国家というこの過激な路線を歩み始める⁽²¹⁾。

ハイデガーが初めてナチ関係者と密接に連携するかたちで公衆の前に自らの姿を現したのは、一九三〇年七月十一日のことであった。この日から三日間の日程で、バーデン州カールスルーエで「バーデン郷土の日」という祭典が開催され、ハイデガーはそのなかの「学術・芸術・経済分野のバーデン賢人会議」で「真理の本質について」という講演を行ったのである。この祭典のなかで講演を行ったりこれに積極的に参加した人物のなかには、ハイデガーのほかに、カイザー・ヴィルヘルム研究所で後にナチの人種学・優生学につながる人類学的・遺伝的研究を行い、ベルリン大学学長となったオイゲン・フィッシャー、右翼的・愛国的な作家レオポルド・ツィーグラ、後にハイデガーと並んでナチの理論家として活躍するエルンスト・クリークらがいたし、そのほかの作家・芸術家・教師・牧師などもすでにこの時点でナチ黨員になっていたかまたはすぐ後にナチ黨員になった人物ばかりであった⁽²²⁾。われわれの知る限り、ハイデガーは公式にはこの日初めてナチの同調者として公衆の前に登場したのである。

この時の講演「真理の本質について」は、この年の秋と冬にブレーメン、マールブルク、フライブルク、一九三二年にはドレスデンでも同じタイトルで講演されたが、初めて出版されたのは一九四三年である。その過程のなかで、おそらく最初の講演原稿は何度も推敲されたであろうし、公刊されるにあたっても新たな修正・加筆が行われたであろうから、この時の講演内容を完全に再現することはできないし、これと印刷された形態とを比較考量することもできない。しかし、この講演は、ハイデガーが一九三〇年から一九三一年にかけての冬学期で行った同じタイトルの講義『真理の本質について』と密接に関連している。この講義のなかにも、ハイデガーがナチスの路線に向かって歩み始めたと解釈されうる箇所が散見される。

ハイデガーのこの講義は、プラトンの『国家』のなかで叙述されている有名な「洞窟の比喩」をテキストとして取り上げている。「洞窟の比喩」とは、われわれ人間は洞窟のなかに閉じこめられ、手足を縛られて身動きできないまま、洞窟のなかの壁に向き合うようにされているために、この壁面に映る外界の幻影を見ているに過ぎず、訓練された哲学者だけが外のアイデアの世界、すなわち真実の世界をかいま見ることができるだけだという物語のことである。ハイデガーはこの講義のなかで、ギリシャ語で真理を意味するアレーテアをア・レーテア、すなわち「非隠匿性」、言い換えれば「隠されていないこと」として解釈しながら、「真理とはやはり概して、人間が規範としてこれに自らを結び付けるようなものであり、人間を超えて立つところのものである」⁽²³⁾と述べて、「真理」の独自の理解を提示する。そして、しばしばプラトンのテキストそのものを超えて、また時にはプラトンの言葉に自らの思想を重ね合わせながら、例えばこう述べている。「本来的に自由であることは、暗さからの解放者であることである。」⁽²⁴⁾

ここでも引き続き暗い社会状況からの「解放」が論じられているが、『形而上学の根本概念』との第一の相違は、この講義の第一章第一節第十節のタイトルが「囚人の解放者としての哲学

者」となっていることで了解されるように、哲学者が「解放」の主体として位置づけられていることである。第二の相違点は、「自由であること、解放者であることは、存在にふさわしくわれわれにぞくする者たちの歴史において共に行動することである」⁽²⁵⁾、そして「非隠匿性は恒常的な解放の歴史のうちでのみ生起する。だが、歴史はつねに一回限りの委託、行動の決定的な状況における運命であって、気ままに揺れ動く議論そのものではない」⁽²⁶⁾という叙述に見られるように、「歴史」と「行動」が前面に登場している。しかし、ハイデガーによれば、「非隠匿性」としての「真理」の実現とは、「歴史」のうちで「行動」することによっておのれの反対物である「隠匿」を克服することにほかならないから、「隠匿」との「対決」でもあり、これとの「闘争」でもある。「隠匿開示性、つまり隠匿の克服は、それがおのれのうちで隠匿性に対する根源的な闘争でないとするれば、まったく本来的に生起しない。根源的な闘争（論争などというわけではない）が意味しているのは、自分に最初に敵と反対者さえも作りだし、そしてこれをおのれの最も鋭い反対者にする闘争である。」⁽²⁷⁾ハイデガーが「歴史」における「真理」の実現のための「行動」を「根源的な闘争」と結合していることは、たんなるプラトン解釈を大きく超えて、ナチ革命に参入する直前の彼の政治的姿勢をいっそう鮮明に、そしてそのラディカルさをいっそう増幅して示していると見ることができよう。

この講義のなかで見逃すことのできないもうひとつの箇所は、ハイデガーが人間の本質を「非秘蔵性」としての真理の本質への問いと関係させながら問うており、そのさいに「人間の本質をこのように問うことがすべての教育学と心理学にさらに先立っており、すべての人間学とヒューマニズムに先立っている」⁽²⁸⁾と述べていることである。この箇所はただたんに、ハイデガーが存在の真理や人間の本質をハイデガーのやり方で問うことがすべての教育学と心理学、すべての人間学とヒューマニズムに先立たなければならないと主張していると理解されてはならないであろう。ここで注意しなければならないのは、ハイデガーの思想的立場がここからもう一歩足を踏み出し、ニーチェの思想を受け入れて、いわゆるヒューマニズムそのものから離脱または決別していることを宣言していると理解すべきである。それというのも、ハイデガー自身がこの講義の後に付した補遺のなかで、概略次のように述べているからである。プラトンのイデア論によってキリスト教の神概念が展開され、これにもとづいて近代理性概念、啓蒙の時代、ドイツ古典主義、ロマン主義的反動が生じたが、これらはヘーゲルによって完成されたかたちで結合された、これはプラトン主義のキリスト教的完成であり、そこから一方ではマルクスの思想が生まれ、他方ではキルケゴールの思想が生まれた、と。そして次の言葉が続いている。「そして、十九世紀と二〇世紀初頭においてこれらすべての力が薄められ、混合され、無害化され、十九世紀の終わりにニーチェが三つの前線（ヒューマニズム、キリスト教、啓蒙主義）に対して反対した。それ以来、人間のいかなる明瞭な立場と態度も存在せず、またいかなる根源的、決定的、創造的、精神的、歴史的立場とも態度も存在しない。…状況と立場が存在するのはそのつとただ決定の必然性の内部における行為し一気遣う対決のうちにおけるの

みである。」⁽²⁹⁾この引用文の後半に見られる言葉は謎めいているが、ヒューマニズム、キリスト教、啓蒙主義に対するこうした反対は、ハイデガーがニーチェと共有するものであり、生涯をつうじていただき続けることになった思想にほかならない。

この講義の一部は、さらに修正・推敲されて一九四二年に『プラトンの真理論』として出版されたが、その末尾近くでハイデガーは「プラトンの思考における形而上学の発端は同時に『ヒューマニズム』の発端である。…これ以後は、『ヒューマニズム』は形而上学の発端、その展開、その終局と結びついた過程を意味する」⁽³⁰⁾として、ヒューマニズムと克服されるべき形而上学を同一のものと見なし、ヒューマニズムに断固たる反対を公言したことも上記のことを傍証している。これは、ハイデガーが第二次世界大戦後にフランスのジャン・ポーフレの求めに応じて書いた書簡『ヒューマニズムについて』で展開された反ヒューマニズムの思想につながるものである。したがって、ハイデガーはここでも、やがてヒトラーの蛮行につながる道に大きな障害としてたちはだからざるをえないヒューマニズムとも決別し、こうしてナチズムへの道をも自らの手で掃き清めることになったのである。

第三章 フライブルク学長時代のハイデガーとナチズム

ドイツにおけるナチスの躍進という政治情勢の緊迫化に対応して、ハイデガーが講義や講演のなかだけでなく政治行動のうえでもナチズムに急速に接近しつつあったことは、先にあげた証言のほか、ハイデガーは遅くとも一九三二年にはナチとして著名であったというエリック・ヴェーユの証言⁽³¹⁾、そしてルネ・シッケレが一九三二年八月の彼の日記にフライブルク大学関係者の間では「ハイデガーはもはやチナたちとだけしかつきあっていない」という噂があると記したことによっても明らかである⁽³²⁾。さらにハイデガーは同年十二月八日付のヤスパース宛の手紙のなかで、「哲学の来るべき数十年のために基盤と空間を作り出すことに成功するでしょうか。はるかなる任務を自ら担う人々が現れるでしょうか」と書き送っている⁽³³⁾。ヤスパースにはハイデガーのこうした言葉の政治的含意は不明であったに違いないが、この「はるかなる任務」という言葉はおよそ半年後のハイデガーの学長演説のなかで数回にわたって用いられることになる。

ハイデガーが一九三三年一月にヒトラーが帝国宰相に指名されてナチスが権力を掌握してナチ革命がドイツ全国に燎原の火のごとくに拡大していくさまを、歴史の開闢の瞬間に立ち会う者として歓呼して迎えたことは想像するに難くない。その直後の二月にハイデガーは後にナチの理論家として活躍するエルンスト・クリークから彼が設立を計画していた「ドイツ大学教師文化政治集団」の創設に加わるように要請されて、これに全面的に賛同し、三月にはその会議にフライブルク大学の代議員として参加している。同年三月十八日にハイデガーはハイデルベルクのヤスパースの自宅を久しぶりで訪問したのだが、ハイデガーは別れ際に「大学を救うた

めに参入しなければならない」と述べたという⁽³⁴⁾。ハイデガーがナチに入党するのはもはや時間の問題であった。

ハイデガーがフライブルク大学の学長候補者として取り沙汰されるのは、この少し後のことである。フライブルク大学では、その前年の十二月に医学部長のヴィルヘルム・フォン・メレンドルフが学長ザウアーの推薦で次期学長内定者となった。解剖学者であった彼は学内では人望の厚い人物であったが、政治的には社会民主党の党员にぞくしていた。ワイマール共和国はナチスの躍進を背景に終焉の時を迎えようとしていた。フォン・メレンドルフは、社会主義者であったことと、当時フライブルク市長であったがすぐ後に罷免されることになるハンス・ベンダーと友人であったこととのために、ナチとナチの新聞から激しく攻撃されていた。明るる年から、フライブルク大学内では、古典文献学者のヴォルフガング・シャーデヴァルトを中心とするナチのグループが学長予定者フォン・メレンドルフを解任するために画策しており、この過程のなかからナチに急接近していたハイデガーが次期学長候補者として脚光を浴びることになる。ナチスにとっても、すでに世界的な名声を得ていたハイデガーが大いに利用価値のある得難い人物であったことは疑いの余地がない。

ハイデガーが学長に担ぎ出される直前の状況を伝えているのが、彼がヤスパースに宛てて送った一九三三年四月三日付けの手紙である。この手紙のなかでハイデガーは、大学の変革計画にかんする情報を入手したいと述べ、ポイムラーが短い手紙をよこしただけで沈黙し、クリークからは何の返事もないことを嘆いている。そして、「四月六日にもろもろの哲学部の研究チームの会議が開催されることになっています。当地の派遣者はシャーデヴァルトです」と述べ、「多くのことがぼんやりとして不確かですが、それにつれて私はますます、われわれが新しい現実のなかに入り込んでいること、ひとつの時代が古くなってしまったことを感じつつあります。すべては、われわれが哲学に正しい出撃地点を用意できるかどうか、哲学に力を貸して発言権を得させるかどうかにかかっています」と続けている⁽³⁵⁾。当時は政治に無関心であったヤスパースにはこれらの語句に秘めたハイデガーの政治的変化とその意図は理解できなかったに違いないが、ハイデガーが明らかに政治情勢の急展開に対応して自ら「出撃」の意志を固めつつある様子が伺える。

おそらくはハイデガーのこの手紙に見える会議とも呼応して、四月上旬にバーデン州カールスルーエにある内務省のナチ大学担当官オイゲン・フェーアレが視察のためにフライブルク大学を訪れ、ザウアーやフォン・メレンドルフと会見しただけでなく、ナチ系の教授たちとも会合して党活動の調整を行った。このなかで次期学長にかんする根回しが行われたであろうことは想像するに難くない。フライブルク大学最古参のナチ党员ヴォルフガング・アリーがフェーアレ宛てに四月九日に書き送った報告文書のなかで、学長選挙に出撃しようとしていたハイデガーとその取り巻きの様子が伺える⁽³⁶⁾。この時点でハイデガーは学長職の受託にかんしてすでにバーデン州を超えてプロイセン文部省との折衝に入っており、アリーを含むナチ党员た

ちからは「ハイデガー教授はわれわれの全幅の信頼を得ており、目下のところ彼をフライブルク大学におけるわれわれの代表者と見なすよう、お願いします」というように評価されていたのである。そしてこの時点で、ハイデガーはまだナチに入党してはいないが、目的にかなう場合には入党するにやぶさかではないと表明していたことが知られるのである。つまりハイデガーは、四月十五日に学長になったばかりのフォン・メレンドルフが自ら辞任を申し出た後の二十一日に、自らの意志によって、フライブルク大学における「強制的同質化」というナチの旗印のもとに、ナチ当局のお墨付きを得ながらナチ系同僚たちの舞台裏の周到な準備と根回しの後に、ナチの期待を一身に集めながら、学長に選出されたのである。

周知のように、フライブルク大学学長に選ばれたハイデガーは、同年五月一日の労働祭典の日を期して、エーリヒ・ロートハッカー、アルノルト・ゲーレン、アルフレート・ボイムラー、ハインツ・ハイムゼート、テオドール・リットらの著名な学者たちを含めて二二人の大学教授たちとともに、いっせいにナチ党に入党した。しかし、ハイデガーを初めとする知識人たちがこの日を期してナチに入党したという歴史的事実は、先に述べたような嵐のように進行した当時のナチ権力の確立過程を思い起こすならば、ナチ革命のこうしたファッショ的で暴力的なやり方とこれによって成立したナチ体制のすべてを承認するというにほかならないから、当時の状況に照らして見れば、決してたんなる形式的事実として片付けられてはならない。彼らの入党はナチ党にとってはその力を全国に誇示するセレモニーにほかならなかったし、ヒトラー総統とナチ党のもとに一切の権力を集中して全体主義的国家を創出するというこうした激動的な過程のなかでナチに入党したということは、ナチ党の綱領のみならず、上記のようなヒトラーのファッショ的政策およびこれに対する政治的批判者とユダヤ人に対する突撃隊・親衛隊の暴力的なテロ行為をも正当なものとして承認しつつ、党の隊列に加わったことを意味するからである。

ハイデガーは五月二七日に大げさな学長就任式典を開催し、そのなかで「ドイツの大学の自己主張」と題する演説を行った。この演説は次のような断固たる言葉で開始されている。「学長職を引き受けるということは、この大学の精神的指導にたいして義務を負うことである。教師と学生たちの服従はただドイツ的大学の本質に真にかつ共同して根ざすことからのみ目覚め、強められる。だが、この本質が明確さ、偉大さ、力に達するのは、何よりもそしていかなる時にも指導者たち自身が— ドイツ民族の運命を強制しておのれの歴史に刻み込むあの精神的付託の峻厳さによって導かれて— 指導される者である場合である。」⁽³⁷⁾新しい学長ハイデガーはこの就任演説のなかで正真正銘のナチ黨員として、そして全身全霊を党に捧げてやまない熱烈な黨員として、公の場に姿を現している。その演説は、急速にナチの独裁化へ向けて動き出した緊迫した政治情勢をナチ革命として全面的に賛美し、これを「この勃興の壮麗さと偉大さ」⁽³⁸⁾として歴史哲学的に位置づけているばかりか、大学をこのナチ革命の精神と政治的プログラムにあますところなく一致させ、大学人を国民社会主義的国家へと総動員することを

要求するとともに、学長として自らその実践の先頭に立つことを全国に伝える戦闘的な宣言にほかならない。

この演説の冒頭部分からして、ナチ特有の語彙と突撃隊的な軍隊用語とが混交されているだけでなく、ハイデガーが『存在と時間』で定式化した用語がさらにこれらの語彙の支えとなっており、しかも論調が歴史哲学的な深みさえも与えられて展開されていることが理解される。原書にしてわずか十頁あまりのこの演説にはさまざまな思想が凝縮されているが、「指導」「服従」「進軍」「歩行法則」「最も危険な最前線」「出征する」などの軍隊用語、そして『戦争論』の著者として名高いクラウゼヴィッツの語句のわざとらしい引用はこの演説の好戦的・軍事的性格をはっきりと示しているし、「本質意志」「指導者たち」「共同」「ドイツ民族」「民族共同体への献身」「闘争」「民族の血と大地」などの語彙と「われわれは自己であることを意志する」などの語法、そして「国防奉仕と勤労奉仕」の強調はまさしくナチと突撃隊のスローガンそのものであった。演説を締めくくるプラトンの『国家』からの引用は、ハイデガーによってわざわざ「偉大なるものはすべて嵐 Sturm のなかに立つ」と訳され、ナチの先兵であった突撃隊 Sturmabteilung に明らかに媚びを売っている。この演説の語彙と語法はナチとその賛同者たちに与える大きな心理的効果を計算しながら散りばめられているように思われる。

他方でそれは、ナチ革命を歴史的「瞬間」またはカイロス（歴史的好機）と見なし、「はるかなる任務」におのれを委ねることを求め、眼前に生起しつつある出来事が歴史の「精神的付託」によって「ドイツ民族」の「運命」を「歴史」のうちへと刻印するなど、演説の基礎にはハイデガーの歴史観をはっきりと見て取ることができる。しかもこうした歴史観は、ハイデガー特有の哲学的な諸カテゴリーとともに表現されている。例えば、全ドイツ学生の「決意性」に言及され、大学人に「共同の決断」が要求され、「存在」は「自らを常に秘匿する」ものとされ、「現存在の威力」などの用語が頻出し、あまつさえ「精神とは存在の本質に向けての根源的に規定された決意である」などの表現はハイデガー哲学そのものである。

さらに、この演説のなかでは、伝統的な「大学の自治」と「アカデミーの自由」が口先だけのものとしてけなされ、「西洋の精神的な力は無力をさらけ出し、今にも崩壊寸前となっている」し、「命脈の尽きた外見だけの文化が崩れ落ち、すべての諸力が混乱へと引き込まれ、狂気のうちに窒息させられている」という時代の診断は、まさしく保守革命のそれである。これに対して真の学問の条件として掲げられるのは、「われわれが自らを再びわれわれの精神的・歴史的現存在の開始という力のもとに置く」ことである。だがこの「開始とはギリシャ哲学の勃興のことである」。キリスト教的・神学的な世界解釈と近代の数学的・技術的思考がこのギリシャ的開始と勃興とを遠ざけたのだから、ギリシャ的な学の開始へと勃興を回復することが「はるかなる摂理」とされる。この演説を聴いたレーヴィットが、演説の末尾ではその場にいた誰もがソクラテス以前の哲学を勉強したらいいのか、それとも突撃隊と一緒に進んだらいいのかわからなくなった、と回想している⁽³⁹⁾のももっともであろう。

ともあれ、ハイデガーが『存在と時間』のなかで定式化したさまざまな諸概念がナチ革命のなかで現実と合体し、骨肉化することとなった。言い換えれば、『存在と時間』は実存哲学という抽象的な理論から現実の政治へと引き下ろされ、これと合体し、具体的な現実によって肉付けされたのである。例えば、人間的な現存在の「本来性」は、ナチズムのスローガンであったドイツ民族の「民族共同体」として具体的な内実を獲得し、「決意性」や「決断」はナチズムによる「良心の呼び声」によって仲介されてナチズムにたいする参加への「決意」または「決断」として、「英雄」はヒトラーとして体現された、といて差し支えないであろう。いやそれどころか、それ以上のことであった可能性がある。つまり、先に引用した学長演説の冒頭で、ハイデガーは「指導者たち die Führer（指導者の複数形）が指導される」と述べたからであり、このことは決してささやかな文法上の問題ではない。ペッケラーが言うように、学長演説を行ったとき、得意の絶頂にあったハイデガーの脳裏には、自らがナチ革命の精神的指導者としてヒトラーを含む政治的指導者たちを指導するのだという意気込みがあった可能性は否定することができない⁽⁴⁰⁾。

ハイデガーは、学長就任式典のなかでナチの英雄であるホルスト・ヴェッセルの歌を歌わせ、しかもその四番を歌うさいに右手を高くかかげる姿勢をナチ党員でない人々にも要求して学内で物議を醸したのだが、このナチ式の儀礼は、彼の演説の内容に加えて、多くのナチ党員とその支持者たちを鼓舞するものであった。当然ながら、学長に就任したハイデガーは、当地のナチ党の半ば公式的な新聞『アレマン人』によって歓呼をもって歓迎された。そして学長ハイデガーは演説のなかでナチズムとそのスローガンを主張しただけではない。自らの就任演説のなかで述べた、例えば国防奉仕という突撃隊のスローガンをフライブルク大学の中で実践しようとして、ただちに精力的にさまざまな行動を実践している。例えばハイデガーは、実質的な軍事訓練である野外スポーツ訓練を全学期を通じて必修カリキュラムとし、国防スポーツキャンプをフライブルク郊外に設置して学生たちが突撃隊や親衛隊による訓練を受けることができるようにするなど、大学のカリキュラム改革を軍事的な方向へと改変しようとした。そして、公務員制度再建法の第三条を特に厳密に適用して大学からユダヤ系の教官を排除したばかりか、大学の講義の開始と終了の時に「ハイル・ヒトラー」のナチ式敬礼を義務づけたのもハイデガーであった。ハイデガーが学長として行ったもうひとつの課題は、国家の指導者である総統ヒトラーのもとへとすべての権力を集中することを意図する「指導者原理」にしたがって、大学においても学部自治や評議員会の権限を縮小・廃止して、学長に権限を集中することであった。これは同年十月一日をもってハイデガーがフライブルク大学の「指導者=学長」に任命されたことで現実化した。ハイデガーはそうすることで、大学と国家との関係を、ナチズムの変革の路線にきわめて忠実に、そしてきわめてラディカルに変革しようとしていたのである。このことは、十二月二十日という時点になってなお、学長ハイデガーの通達文書のなかに「私の学長着任のその最初の日からして、規定する根拠であり、本来の目的であり、しかも段階的にのみ

可能な目標となっているのは、ナチズムの国家の諸力と要求とにもとづいて学術的な教育を改革することである⁽⁴¹⁾と書かれていることで明白である。

ハイデガーがこの当時いかにナチ革命を熱烈に歓迎し、これに自らを同化して行動していたかは、この時期に例えば同年夏学期の講義「哲学の根本問題」のなかでナチ革命を「われわれの民族のこの偉大な運動」⁽⁴²⁾と形容し、ハイデルベルク大学での「新しい帝国の大学」と題する講演では「ヒューマニズムやキリスト教の考えによって窒息させられることのないナチズムの精神を体し、こうしたことに抗して仮借なき戦いがなされねばならない」、「戦いは、民族の宰相ヒトラーが実現する新しい帝国の諸勢力を結集して行われる。…この戦いは大学の教師と指導者を作り出すための戦いである」⁽⁴³⁾と述べたことで明らかである。また、彼は『フライブルク学生新聞』に寄稿した一文のなかで「学説や『理念』が諸君の存在の規範であってはならない。総統こそが、それ自身そして唯一の、今日と将来のドイツの現実であり、その掟なのである」⁽⁴⁴⁾と述べさせた。ハイデガーは後になってこれらの自らの言動が大学の「精神的革命」を目指そうとしたものだと弁明しているが、これが意図的な虚偽であることは現在ではまったく疑う余地がありえない。

ハイデガーのアクティヴ・ナチとしての活動はたんに大学の講義や講演のなかだけにはとどまらなかった。ハイデガーはことあるごとに突撃隊の先兵を務めていた学生連盟の集会に出席して演説して「労働奉仕」を呼びかけたり、ナチ系の学生新聞に寄稿したりした。彼はこの時期、ナチ革命に自らを完全に同化し、しかも民衆主義的な突撃隊の精神で行動していたのであって、それは例えばハイデガーがこの年の九月に「バーデン家具職人親方同盟」の第二十二回大会にまで出席して「ドイツの労働はすべて精神の労働と手仕事であり、したがって大学も手工業も、国家に威信と名誉を外に向かって示すために協力しなければならない」と式辞を述べたほどであった⁽⁴⁵⁾。またハイデガーは、ナチ革命に賛同する大学人と共同して、シュプランガーらによって運営されていた「ドイツ大学連盟」を「強制的同質化」のもとに置こうとして、ヒトラーに直接電報を打電したりしてもいる。

ハイデガーは大学人を労働奉仕と軍事奉仕へと動員するこうした突撃隊的な路線を突っ走った後、同年十月にはバーデン州文部大臣から「指導者＝学長」に任命され、十一月十一日には国民投票で支持を固めようとしてナチ党のために「ドイツの学者の政治集会」で演説し、ドイツの国際連盟脱退を賛美しながら、ヒトラーへの投票を呼びかけた。彼が『存在と時間』を送り出したトートナウベルクの山荘はナチ革命のための会合や学問キャンプのための場所を提供した。しかし、この頃から「指導者＝学長」ハイデガーのあまりにもラディカルで突撃隊の路線に忠実なこうした大学「改革」に学内が抵抗し始め、彼の指導力は挫折し始めた。例えば、ハイデガーの腹心であり彼によって任命された法学部長エーリク・ヴォルフは、突撃隊奉仕、国防スポーツキャンプを教練科目として採用するという法学部カリキュラムの改革を推進しようとして、法学部内で激しい摩擦を引き起こした。またヴォルフは、国民経済学の代講を行い

ナチ学生への攻撃にさらされていた自由主義者のアドルフ・ランペを解任したが、ランペはこの件にかんする訴えをバーデン州文部省に持ち込み、このことがハイデガーの知らない所で大学にたいする文部大臣の介入を生んで、やがてヴォルフは辞任に追い込まれることになった。そして、その責任はヴォルフの任命責任者であるハイデガーにも及んでくる。さらに、カトリック学生組合「リプアリア」の解散をめぐるナチ内部の内紛がこれらに拍車をかけた。こうした確執のなかで学長職に留まることに嫌気がさしたハイデガーは、一九三四年四月二三日にこれを最終的にはとうとう投げ出したのである。かつて学長ハイデガーのデビューを歓呼をもって華々しく伝えた『アレマン人』は、辞任するハイデガーにかんして当地の大学担当官が「ナチズムの精神をこの大学に浸透させたこと」および「この大学の新しい構成に尽くしたこと」を感謝したという簡単な記事を掲載しただけであった⁽⁴⁶⁾。

大学内での自らの講義、そして大学内外のさまざまな集会での講演などでこうしたナチ賛美の演説を行って学生や若い教官たちにナチへの支持を呼びかけ、その結果として彼らをナチズムへと動員することになった学長ハイデガーの政治的責任は、たとえおよそ一年間しか続かなかったとはいえ、決して小さかったとは言えないであろう。

第四章 学長辞任後のハイデガーとナチズムとの関わり

学長職辞任後のハイデガーは、学長職の失敗のほかに、次のふたつの出来事でこれまで彼が取ってきたナチとナチズムにたいする姿勢を少々修正して、これらからやや距離を置くことになった。

ひとつは、ハイデガーが学長を辞任した後わずか二カ月後の六月三〇日に起こったエルンスト・レーム粛清事件である。突撃隊隊長でありヒトラーに次いでナチ党ナンバー2の地位にあったレームとその一派がヒトラー派によっていっせいに逮捕・殺害されたこの事件を契機として、ナチ党はそれまでの民衆主義的・行動主義的路線を転換して、国家独占資本との妥協へと決定的に歩み出すのだが、ナチのこの路線の転換は、それまで突撃隊の国防奉仕と労働奉仕という路線に忠実に行動していたハイデガーにとって、彼自身が残した著作や講義のなかでこのことが明確に表現されているわけではないにしても、やはりひとつの大きな衝撃であったに相違ないであろう。

もうひとつは、ナチ内部の思想闘争が激化し始めたことである。すでにハイデガーの学長就任演説のなかに、ドイツ民族の自己実現と学問の初期のギリシャ的意味への回帰または「存在」の回復という二律背反的なものを結合させるという矛盾が潜在していたのだが、こうしたハイデガー個人が信奉していた独特な哲学的なナチズムと、ナチ党のイデオロギー局を牛耳っていたアルフレート・ローゼンベルクの『二十世紀の神話』に代表される単純で公式的な生物学的・人種的なナチズムとの間の齟齬と対立が次第に顕在化していった。ローゼンベルクのみならず、

ハイデガーと共に闘ってきたエルンスト・クリークも自らが主宰する雑誌『生成する民族』でハイデガーとその哲学を口汚く攻撃するようになったし、ハイデガーとボイムラーもまたニーチェの理解をめぐって対立するようになった。そういう訳で、オットによれば、ハイデガーもまた一九三六年頃からナチ保安諜報部の監視を受けることになったという。しかし、当局から監視を受けていたナチ知識人は多数いたのであって、決してハイデガー一人にはとどまらなかった。例えば、ハイデガーと同じ日にナチに入党したゲーレンもまた、一九四〇年に刊行した『人間。その世界における位置』が生物学的・人種的な観点が希薄であるとのかどで、批判を受けていた⁽⁴⁷⁾。しかし、ハイデガーは学長時代にナチとナチズムにたいして取っていたスタンスを一定程度修正したとはいえ、依然として近代のニヒリズムを克服する変革の原動力として、ハイデガー自身の存在思想に支えられた理想的なナチズムを信奉する政治的な姿勢という点では、いささかも変化するところがなかった。

われわれは、ハイデガーが学長辞任後もナチであり続けた証拠として、さまざまな事実を挙げるができる。

例えば、ハイデガーがヒトラーによるレーム肅清が行われた後の一九三五年夏学期に講義した『形而上学入門』のなかには次のような一節がある。「このヨーロッパは今日救いがたい盲目のままに、いつも我と我が身を刺し殺そうと身構え、一方にはロシア、一方にはアメリカと、両方から挟まれて大きな万力のなかに横たわっている。ロシアもアメリカも形而上学的に見ればともに同じである。それは、狂奔する技術と平凡人の無底の組織との絶望的狂乱である。」⁽⁴⁸⁾

「したがって、全体としての存在者そのものについて問うこと、存在の問いを問うことは、精神を覚醒させるための本質的な条件のひとつであり、したがって歴史的現存在の根源的な世界のための、したがってまた世界の暗黒化の危険を制御するための、したがってまた西洋の中心である我がドイツ民族の歴史的使命を引き受けるための本質的な根本条件である。」⁽⁴⁹⁾ さらにハイデガーは、こうしたきわめてナチ的な言辞に加えて、「今日、すっかり国民社会主義の哲学として出回ってはいるが、この運動の内的真理と偉大さとはまったく何の関係もないものは、『価値』と『全体性』のこの濁流のなかで網打ち漁をしているのである」⁽⁵⁰⁾と述べて、「国民社会主義」、すなわちナチズムについて「この運動の内的真理と偉大さ」とまで評価したのである。ハイデガーのこの時の講義では、この文章中では「この運動 dieser Bewegung」ではなくて、強調の定冠詞をつけて「運動 die Bewegung」となっており、「ほかでもないナチズムの運動」を指し示していたという。彼は第二次世界大戦後の一九五三年にこれを初めて公刊したが、そのさいに彼のナチ時代の講義をそのまま出版しただけでなく、ハイデガー自身が難の断りもなくこの部分に丸括弧を付け加えて「(惑星規模で規定された技術と西洋人と出会い)」という挿入句を入れ、この挿入句がもともとの講義原稿に最初からあったと主張したことが、ハーバマスらによって問題とされた⁽⁵¹⁾。

さらにハイデガーは、一九三六年夏学期の「シェリング」講義でも、やや唐突にムッソリー

ニとヒトラーの名をあげてこれを肯定的に評価し、こう述べている。「いずれにしても次のことはよく知られている。それは、ムッソリーニとヒトラーのことなのだが、国民または民族の政治的な形態からすれば—しかも異なった仕方でも—ニヒリズムに対する反対の運動をヨーロッパに持ち込んだこの二人の人物は、またしても異なった観点からニーチェによって本質的に規定されているのであって、このことは、そのさいにニーチェの思索のもとと形而上学的な領域が直接に効果を発揮することがないとしてもやはりそうなのである。」⁽⁵²⁾ここでハイデガーは、ムッソリーニとヒトラーがニーチェの影響を受けながらニヒリズムに反対する運動を西欧に持ち込んだことを評価しつつも、彼らにあってはニーチェの形而上学の領域が効果を発揮していないとし、そうすることができてしかもニヒリズムに真に対抗しうるのは哲学者だけであるという趣旨のことを述べている。したがって、この時点でもなおハイデガーはナチ革命の主導的役割が彼ら政治的指導者たちよりも哲学者になければならないと固く信じていたと思われる。

周知のように、この時期のハイデガーとナチズムとの関係をもっともよく示すのが、この時ローマに亡命していたカール・レーヴィットの次のような証言である。ハイデガーは一九三六年にローマのイタリア・ドイツ文化研究所に招かれてヘルダーリンにかんする講演を行ったが、そのさいにハイデガー一家とレーヴィット夫妻は最後の邂逅をすることになる。彼らが郊外に遠足にでかけた時も、ハイデガーはナチの党員バッジを上着につけたまま、はずすことがなかった。レーヴィットがハイデガーのナチズム支持が彼の哲学の本質に由来するものだと述べたところ、ハイデガーはこれに留保することなしに同意し、自らの「歴史性」の概念が政治的出動の基礎だと述べたばかりか、ヒトラーにたいする信頼についても疑問の余地がなかった。そして、「ナチズムがドイツの発展の方向を指し示す道だと相変わらず確信していた。」⁽⁵³⁾

ところでハイデガーは、一九三五年頃から再び精力的にニーチェ研究に取り組み始め、明るく一九三六年から合わせて六学期もの間ニーチェにかんする連続講義を行った。一九三六年から三七年にかけての講義『ニーチェ。芸術としての力への意志』においても、ハイデガーは民主主義に対する敵対心を隠すことなく次のように公然と表明している。「ヨーロッパは相変わらず『民主主義』にしがみつこうとし、これがヨーロッパの歴史的な死滅になるであろうことを学ぼうともしない。というのは、ニーチェがはっきりと見たように、民主主義とはニヒリズムの、すなわち最上の諸価値の価値剥奪の一変種にすぎず、まさしく『価値』でしかなく、もはや形態を与える諸力ではないほどだからである。」⁽⁵⁴⁾

しかし、ニーチェにかんする連続講義が進行するにつれて、ハイデガーのニーチェにたいする理解と評価に次第に変化が生じ始め、やがてハイデガー自身の表現で言えば、これらが「ニーチェとの対決」および「これまでの西洋的思考一般との対決」という様相を見せ始める⁽⁵⁵⁾。例えば、ハイデガーはこう述べている。「ニーチェはニヒリズムを近代の西洋の歴史の運動として認識しているが、しかし、無の本質を問うことができないために、無の本質を思考するこ

とができない。そのために彼は今生起している歴史を言い表す古典的なニヒリストにならざるをえない。」⁽⁵⁶⁾「それゆえにニーチェは、ニヒリズムを初めから、そして価値思想からのみ最上の価値の価値剥奪の行程として把握しているから、もろもろの洞察にもかかわらず、ニヒリズムの隠された本質を把握することができない。」⁽⁵⁷⁾つまり、ニーチェは西洋の歴史の根本方向がニヒリズムの完成であることを正しく洞察しながらも、その克服によって生ずる新たな転換を「力への意志」として、すなわちまたしても人間を主体とする新たな価値原理として指し示したために、かえって主体性の形而上学へと落ち込んでしまったと解釈される。ハイデガーによれば、ニーチェが「力への意志」や「永遠回帰」の思想によって形而上学の終末を告知しながらも、結局のところこの形而上学を克服することができなかったために、ニーチェは結局のところ西洋最後の形而上学者として位置づけられるのであって、ニーチェの思想と形而上学の克服が新たな課題として掲げられなくてはならない。そして、西洋の伝統と化した形而上学の開始点がプラトンとそれ以後の哲学にあるのだとすれば、形而上学を克服する新たな哲学の開始はこの伝統とは異なった「別の開始」として探し求められなくてはならない。

ハイデガーは、こうしてニーチェの思想を対決の対象とするにつれて、「力への意志」が理想や超越的な彼岸をもたずにそれ自体を自己目的とする「意志の意志」と化して「機械的経済」の無制限の支配を生み出している近代社会と、その根源にあつてすべてを計算合理性のもとにおく近代技術とを批判の対象とするようになり、その限りにおいて彼がかつて心酔きついていたナチ革命とそれによって作り出された国民社会主義的国家の路線にこれまでとは違った距離の置き方をするようになる。彼は、一九三八年六月のフライブルクでの講演『世界像の時代』のなかで、デカルトに典型的に現れているように、人間を主体とし、主観主義と個人主義にもとづいて世界を像として支配を貫徹しようとする近代社会に警告を発するとともに、ヒューマニズムの発生源である世界観と人間学を拒否したのだが、その講演原稿の補遺に次のような文章を書き加えている。「そのこと [人間学] によって精神的状況が明確となるが、一方では国民社会主義的な諸哲学がそうであるように、矛盾した諸成果の苦勞の多い仕立て上げは混乱を引き起こすだけである。」⁽⁵⁸⁾しかし、本論でいずれ展開するように、こうした言辞といえども、直接のナチズム批判そのものとして受け止めるべきではなくて、ナチ宣伝局の俗流哲学者にたいするあてこすりと理解すべきであろう。

それでは、ハイデガーが一九三六年から三八年にかけて書いたとされ、一九八九年になって初めて公刊された、膨大な草稿群である『哲学の寄与』ではどうであろうか。

確かに当時のナチの個々の政策との関わりで見れば、これに対する批判的見解が存在する。例えば、次の一節は明らかにヒトラー政権とカトリックとの政教条約を批判したものである。「だが、総体的な政治的信念と同様に総体的なキリスト教的信念とが、統一されえないのに、それにもかかわらず調整と戦略に関わり合っていることは、驚くには及ばない。というのは、これらは [世界観という点で一筆者] 本質が同じだからである。これら両者の根底には、総

体的な姿勢として、本質的な諸決断の断念がある。両者の闘争は創造的な闘争ではなくて、『プロパガンダ』と『護教論』である。⁽⁵⁹⁾しかしこの箇所は、カトリックと妥協したヒトラーの政治路線に対する批判であるにしても、むしろハイデガーの政治的立場がこの時点でなおヒトラーの路線よりもはるかに過激な反カトリックの姿勢を示すものとして受け止めなければならないであろう。

「響き合い」としてまとめられた部分の第五六節には、民族主義を揶揄していると思われる箇所がある。「存在棄却性」が告げ知らされているところを指示して、ハイデガーはこういう覚え書きを記している。「本質具有的だと見なされているものにおける多義的なものにたいする完全な無感覚。多義性は現実的な決断にたいする無力と無意志を引き起こす。例えば『民族』とよばれているものはすべてそうである。つまり、共同体的なもの、人種的なもの、低俗で下等なもの、国民的なもの、持続してあるものはそうである。例えば『『神的』と名付けられるものはすべてそうである。』⁽⁶⁰⁾「歴史的な原存在 Seyn の、例えば民族的なものの諸条件を、そのすべての多義性によって、無制約的なものへと偶像崇拜すること。』⁽⁶¹⁾また、「歴史」と題された第二七三節では、「歴史 die Geschichte」と「史実 die Historie」とが峻別され、近代が形而上学への依存を深めるにつれて本来の「歴史」ではなくてもっぱらたんなる歴史の表面的・平板化された理解でしかない「史実」によって支配されているという憂うべき傾向が指摘される。そして、この文脈のなかでハイデガーはこう述べている。「史実によって規定された歴史理解をつうじて歴史が歴史を欠いたものへと押しやられ、そこで歴史の本質が探究される…。血と人種が歴史の担い手となる。』⁽⁶²⁾ここでもハイデガーは「血と人種」を前面に立てて歴史を理解しようとするナチ宣伝局の卑俗な歴史理解から明らかに距離を置き、これに批判的である。しかし、この批判的な言辞もことのついでに断片的に述べられているだけであって、何ら体系的・系統的になされておらず、しかも根拠を示すというかたちで展開されていない。したがって、シルヴィオ・ヴィエッタのように、こうした断片的な批判的言辞をもってただちにハイデガーが当時明確にナチ批判を展開していたのだという結論を導出することにはかなりの無理があるといえよう⁽⁶³⁾。しかも、これらは草稿に記されたにすぎず、ハイデガーの存命中に公刊されたわけではないのである。

ところで、この時期にハイデガーが著したものを讀むと、彼の思想に大きな転回が生じていることに気づかざるをえない。それは、例えば先に引用した「歴史」の節の文章のすぐ前に次のような一文があることによって知られる。「もちろん人間が歴史を達成しているかどうか、歴史の本質が存在物を超えて行くかどうか、史実が根絶されうるかどうかは、予測されない。そのことは原存在 Seyn そのものに委ねられている。』⁽⁶⁴⁾つまりハイデガーによれば、存在棄却性は、歴史の史実化を初め、近代社会のさまざまな局面で生じており、それ自体形而上学の現れにはかならないのであるが、それではどうすれば存在棄却性および形而上学を克服しうるのかということになると、この問題の解決は存在そのものまたは「原存在」に委ねられている

のであって、個々の人間の実践または努力によって解決されるものでは決してない。近代社会の破滅的な徴候は歴史的な出来事であり、存在史的に生起しているものであって、こうした破滅からはたして現代人が救われるのかどうかという問題も存在史的に規定されており、したがってこうした問題の所在とその解決のすべてが宿命論的にとらえられることになる。

ハイデガーの思想内部に生じたこうした大きな変化は、他方では、近代技術にかんするハイデガーの見方の変化と連動して生じたと考えられる。この当時、ドイツの社会情勢は第二次世界大戦を間近に控えて緊迫の度を高めていた。一九三八年三月にはドイツ軍がオーストリアに侵攻してこれを併合したばかりか、ズデーテン地方の割譲を勝ちとった。十一月にはパリのドイツ大使館書記官がポーランド系ユダヤ人の少年の狙撃によって死亡した事件がきっかけとなって、同月九日夜「帝国水晶の夜」と名付けられた反ユダヤ人ポグロムが発生した。ドイツ全国で多数のシナゴグやユダヤ人商店がいっせいに破壊・放火され、多くのユダヤ人が犠牲となっただけでなく、ドイツ経済からのユダヤ人排除が決定的となった。一九三九年三月にドイツ軍はチェコスロヴァキアに侵攻し、そして八月に独ソ不可侵条約を締結した直後の九月一日、ドイツ軍機甲部隊がポーランドに侵攻して、第二次世界大戦が開始されたのである。

ハイデガー自身の証言によれば、彼は一九三九年から一九四〇年の冬にかけて、同僚たちのサークルのなかで、再びユンガーの著作『労働者』の一部を詳細に議論し、これから新たな示唆を受けたという⁽⁶⁵⁾。すでに述べたようにハイデガーは、一九三〇年に最初にユンガーの著作の研究に取り組んだ時には、ユンガーの「労働者—兵士」による全体主義的国家の創造と「総力戦」への総動員という、初期ナチズムの運動に大きな影響を与えたといわれる思想に共鳴したのだが、今度はこの思想にも距離を置き始め、この思想のうちに近代技術またはテクノロジーが社会のすべてを覆い尽くしている状況が典型的に表現されていると理解したうえで、近代テクノロジーが現代社会において果たしている大きな主導的な役割を「形而上学の支配」として批判的ないし否定的に理解するとともに、こうした技術の全面的な支配からの脱却という課題を「形而上学の克服」としてかかげるようになった。例えば、『哲学への寄与』のなかでも、その第七四節は「根源的な存在棄却性の帰結としての『総動員』」と題されていて、そこでハイデガーは「なお存立している形成陶冶のこれまでのすべての内容を純粹に運動のうちへと置き入れ、そして空洞化させること」について「何のために」「動員のこの優位は何を意味するのか」と自問したうえで、こうしたことによって人間の新しいタイプが強要されることは「目標」ではないと述べていた⁽⁶⁶⁾。

そして、「形而上学の克服」というタイトルでまとめられ、今ではハイデガーが一九四二年に執筆したことが明らかとなっている原稿のなかには、次のような文章が見られる。「『もろもろの世界大戦』とそれらの『総体性』はすでに存在棄却性 *Seinsverlassenheit* の諸帰結である。」⁽⁶⁷⁾「指導者たちは自分から、利己的な我欲の盲目的な半狂乱状態のなかで、思い上がってすべてを行使し、彼らの強情さからすべてを整える、と思われている。本当は彼らは、存在者が錯誤

という仕方に移行してしまったことの必然的な結果である。」⁽⁶⁸⁾「大地は錯誤の非世界として現象する。それは存在史的に見れば錯誤の星である。」⁽⁶⁹⁾この後に続く原稿にも「だが、大地はそれ自身である可能なものの目立たない法則のうちにかくまわれたままである。意志は可能なものに不可能なものを目標として押しつけたのである。こうした強制をもたらす支配し続ける策謀は、技術の本質から生ずる。ここではこの語は完成された形而上学という概念と同一のものとして措定されている」⁽⁷⁰⁾とある。

こうした叙述を見る限り、この時期、確かにハイデガーはナチズムとその指導者たちとの間にこれまでなく距離を置いていたに違いない。一九三三年のナチ革命の時に「歴史の開闢」を見ていたハイデガーの眼には、ナチ革命の結果は今や近代技術の全体主義的な暴走でしかないと映っていたかも知れない。しかし、ハイデガーのテクノロジー批判の対象は、第二次世界大戦に勝利するための「総力戦」に向けて科学・技術を全面的に総動員しつつあったナチ国家の体制に特定されはしない。技術の支配は、ナチと戦いつつあるヨーロッパ列強およびアメリカ合衆国においても同様なのであって、後にハイデガーが「エルンスト・ユンガーが労働者の支配と形態という思想のなかで考え、この思想に照らして見ているものは、惑星的規模で見られた歴史の内部での、力への意志の普遍的な支配である。今日すべてのものはこうした歴史的現実のもとにある。それが、共産主義と呼ばれようが、ファシズムと呼ばれようが、あるいは世界民主主義と呼ばれようが、そうなのである」⁽⁷¹⁾とのべたとおりである。したがって、この時期のハイデガーの技術批判をナチズム批判としてのみとらえることは、その本質を誤って理解することになろう。

ところで、ハイデガーによれば、こうした技術とこれを支える組織の暴走もまた「存在棄却性」の帰結にほかならないから、その限りでは、「存在の回復」を唱える彼の思想は、たとえ現実のナチズムから距離を置いたとしても、ナチズムと両立しえないものではない。なぜならば、技術の暴走の責任はナチズムそのものにあるのではなくて、ナチが「存在」を忘却したことにあるのだからである。だから、ハイデガーのこうした存在論的または存在史的思想は、この時点でもなお、ナチズムの内部にあってもなお依然として大きな意味をもちうると考えられたに違いない。そして他方では、こうした暴走に導く近代技術もまた「原存在」が人間に指し示す宿命にほかならないという宿命論的な理解からは、こうした宿命にたいしては反抗することも闘争することもできず、ただ耐え通すことができるだけだという非実践的な態度が帰結するだけである。いずれにしても、ハイデガーがナチ革命の初期に立脚していたラディカルな行動主義的路線はすっかり影を潜め、これに代わって前面に登場するのは、後に彼が「わずかに神のごときもの ein Gott がわれわれを救うことができるのみです」⁽⁷²⁾と『シュピーゲル』誌インタビューで述べたように、たんなる黙示録的な救済への期待でしかないのである。

この時期にハイデガーは、ナチズムの公式的なイデオロギー、ナチズムの政治路線、政治的指導者たちに一定の距離を置き、部分的にはこれらに対立したとはいえ、それにもかかわらず、

全体としてのナチズムそのものから決定的に離反するという事は、とうとうなかったのである。それというのも、ナチズムとは、しばしば生物学的・人種的側面からのみ見られがちであるが、実際は「ナチ党綱領二五カ条」に象徴されるように、反ユダヤ主義に支えられながらもきわめて雑多な社会的・政治的諸要求のアマルガムから成立していたからである。それは、ヴェルサイユ条約の破棄と他の諸国民とドイツ国民との平等な権利の要求に始まり、ユダヤ民族を国家公民から排除してドイツ民族が経済的に困窮した場合にはこれをドイツから追放すべきだとの民族主義的・人種的要求、労働と努力によらない所得の廃止やすべての企業の国有化などの疑似社会主義的スローガン、議会と民主主義にたいする敵対、ユダヤ主義と唯物論的世界観および共産主義との同一視、政治的中央権力の無制限な権威の確立などの諸要求の雑多な寄せ集めであった⁽⁵⁰⁾。したがって、たとえハイデガーがナチ党宣伝局の公式的な生物学的人種主義を受け入れることができず、またナチ当局にハイデガーの存在論的哲学を受け入れる余地がまったくなかったとしても、ハイデガーはこれらを除いた残りのナチズムの社会的・政治的スローガンには自らを積極的に同化させることができた。もしもハイデガーが本当にナチズムを批判しえたとするれば、これらの綱領に掲げられている主要な部分のすべてに対して明確に批判がなされたという事実が確認されなければならないが、われわれはわれわれの知る限り、ドイツの第三帝国時代をつうじてだけでなく、その生涯をつうじて、ハイデガーが講義、講演、著述などにおいてこうした批判を明確に展開したという証拠を確認することができない。たとえハイデガーにナチズム批判があったとしても、それは全体としてのナチズムに対する部分的な批判にすぎず、たとえハイデガーと公式的なナチとの間に対立があったとしても、それは部分的な対立にすぎなかったのである。

われわれは、第三帝国が崩壊する瞬間まで、ハイデガーが全体としてのナチズムに忠実であった証拠をいくつもあげることができる。

例えば、ドイツがモスクワ攻略に失敗してソ連軍の反攻が開始され、アメリカ合衆国がヒトラーの宣戦布告によって参戦し、やがて戦局の大きな転換点を迎えることになるスターリングラードの攻防が始まろうとする一九四二年の時点においてさえも、ハイデガーはなお、夏学期の講義「ヘルダーリンの賛歌『イスター』」のなかで、ギリシャ人においてはすべてが政治的に規定されていることをもってギリシャ人が純然たる国民社会主義者であるとするようなナチの学者たちの卑俗な解釈を退けて、こう述べている。「ギリシャ人たちはたいていの『研究諸成果』では純粋な国民社会主義者として現れている。学者たちのこうした過剰な熱意は、それがそのような『諸成果』によっては国民社会主義とそれの歴史的無類性 *Eigenartigkeit* にとって何の貢献もしておらず、おまけにこの貢献をまったく必要としてはいないということにまったく気づいていないように思われる。」⁽⁷³⁾つまり、「国民社会主義」はここでも、ハイデガーによってやはり疑いの余地なく、「歴史的無類性」と見なされている。

さらにスターリングラードの攻防戦が激しく戦われてドイツ軍が降伏し、またアウシュ

ヴィッツ・ビルケナウにおいてユダヤ人の大量虐殺が開始された時期である一九四二年から四三年にかけての冬学期の講義『パルメニデス』でも、ハイデガーは西洋の本質の歴史にかんする始元を論じながら、なおも次のように述べている。「この根源的な始元は、最初の始元と同様に、詩人と思索者たちの西洋的に歴史的な民族においてのみ生起しうる。…ひとつの民族は、混乱と困難の経験によって、世界運命を自らのうちに隠している、西洋の歴運の場所へとゆっくりと溶け込むことができるのである。だから、次のように知ることが大切である。この歴史的な民族は、ここでおよそ『勝利すること』が問題であるとすれば、もしもこの民族がおのれの本質のうちにとどまる詩人と思索者たちの民族である場合には、すでに勝利してしまっていて、打ち負かされえず、しかも、おのれの本質から恐ろしく—というのは、威嚇的だからである—逸脱して、その結果おのれの本質を誤認するということの犠牲にならない限りにおいて、そうなのだ、と。」⁽⁷⁴⁾この引用文中でハイデガーは、「詩人と思索者たちの民族」であるドイツ民族は歴史的な民族としてすでに勝利して、決して打ち負かされることはありえない、と述べているのであって、こうした民族主義的見地は、一九三五年の『形而上学入門』の政治姿勢とまったく異なるところはない。というのもそこでは、西洋の中心に位置するドイツ民族だけが形而上学的な民族として「世界の暗黒化の危険」を防止する使命をもつとされていたからである。

また、スターリングラードでの敗戦を境にしてドイツ軍の戦線における後退が始まった一九四三年の講演「ニーチェの言葉『神は死んだ』」のなかで、ハイデガーはニーチェの「公正性 *Gerechtigkeit*」を論じてこう述べている。「ニーチェが念頭に置いている公平性の了解を準備するためには、われわれは、キリスト教的、ヒューマニズム的、啓蒙主義的、ブルジョア的、社会主義的モラルに由来する、公正性にかんする考えはすべて排除しなければならない。」⁽⁷⁵⁾そして、力の優位への意志と能力をもった最も力強い支配者が公正性の原則であるというニーチェの思想を肯定して、こう続けている。「たとえ…公正性にかんするニーチェの形而上学的な概念が一般に流布している考え方にどれほど奇異の念を起こさせようと、それにもかかわらず公正性の本質を言い当てている。この公正性は、近世の時代を完成する開始のなかで、大地の支配をめぐる戦いの内部で、すでに歴史的となっており、だからこその時代の人間のすべての行為を、明確にまたは不明確に、隠れてまたは開かれたかたちで規定している。」⁽⁷⁶⁾こうしたハイデガーの叙述のうちには、本書がナチズムの定義にかかわる箇所ですでに述べたように、既成のすべてのモラルに代えて力の支配を公平性の原則にすえるという倫理的無政府主義、そこから来る大地の支配をめぐる戦いの正当化と好戦性、キリスト教・ヒューマニズム・啓蒙に対する敵対、ブルジョアと社会主義の両方に対する対抗意識などなど、全体としてのナチズムを構成するすべての主張がそろっていると言わざるをえないのである。

一九四三年から四四年にかけてドイツの敗北が濃厚になり始めた時点になると、ハイデガーの論調はさすがにやや後退しはするものの、民族主義的姿勢という点では変化が見られず、そ

の反対に戦局が不利になればなるほど、その姿勢はいつそう強まっていったといえよう。

例えば、彼は冬学期の講義『ヘラクレイトス』のなかでとところどころに唐突に、例えば次のような挿入句を差し挟んだ。「ドイツ民族が西洋の歴史的な民族でありつづけるのか、それともそうでないのかどうかという、このことだけが決定を迫られているのではなくて、今は大地の人間が大地もろとも危険にさらされているのであり、しかも人間自身によってそうなのである。」⁽⁷⁷⁾「だが、もしもドイツ人が、そしてドイツ人だけが西洋を救い出して歴史のうちへともたすことができるとすれば、この知は問いかける知でなければならない。」⁽⁷⁸⁾これらの言葉のなかには、戦局の緊張がこだましているだけではなくて、ドイツ人だけが大地の現在の破局的な状況からヨーロッパを救うことができるのだという民族主義的確信が相変わらず強く表明されていることが了解される。他の箇所では彼はこうも述べている。「この惑星は炎に包まれている。人間の本質は支離滅裂になっている。ドイツ人が『ドイツ的なもの』を見いだし、保持するということが想定されるとすれば、世界史的な熟慮が生まれるのは、ドイツ人からのみである。」⁽⁷⁹⁾

さらに、一九四四年から四五年にかけての冬学期に行われたが、ハイデガーが国民突撃隊に招集されたために途中で中断された講義「哲学入門—思索と詩作」のなかでも、彼は相変わらず「ドイツ人は、その本質からして、ドイツ的なものにもとづいて、ヨーロッパ的なものおよびその歴運にたいする熟慮を働かせ始めるという使命を与えられているであろう。ヨーロッパ的なものの歴運とは、フランス革命と社会主義の台頭以来、世界段階を規定するはずの新しい段階に突入したのである」⁽⁸⁰⁾と述べているばかりか、「実益と成果をあてにしてたんに計算するという思慮分別は平凡人の思慮分別なのであって、それは経済・政治的にみて世界的な広がりや振る舞う場合でも、平凡であり続ける。そこにもすでに歴史的で西洋的な使命の忘却が働いている。それは、富と道徳性と民主主義的なヒューマニティによって飾り立てられることによって埋め合わせができない忘却である」⁽⁸¹⁾とも述べている。政治思想という面から見る限り、ハイデガーの思想の基調はほとんど変化していないということが了解されるであろう。

以上に転回したすべての根拠から見て、ナチズムを信奉して以後のハイデガーの思想は、部分的にナチの公式的なイデオロギーと相反する側面をもちながらも、全体としてはやはりナチズムの思想の枠の内部を動いていて、これから離脱することは決してなかったと言わざるをえないのである。

第五章 第二次世界大戦後のハイデガーとナチズム

一九四五年四月三〇日、ヒトラーが自殺した八日後にナチス・ドイツが連合国軍に無条件降伏し、第三帝国は完全に崩壊した。強制収容所などでホロコーストの犠牲となったヨーロッパ

のユダヤ人の総計はおよそ六百万人近くに達すると推定されるが、彼らに対する未曾有の虐殺もようやくにして終焉を迎えた。ドイツは米・英・仏・ソ連の各国によって占領統治され、ただちに「非ナチ化」の政策が実行された。ナチ時代の指導者は公職から追放され、この「非ナチ化」の対象はやがて次第に民間人にも広げられていった。戦争犯罪人が訴追され、国際軍事法廷である「ニュルンベルク裁判」では重大戦争犯罪人が裁かれることになったが、この裁判が進行する過程で明らかにされたナチの蛮行は世界に大きな衝撃を与えた。

さて、フライブルクにはフランス占領軍が進駐し、ただちに「典型的なナチ」と見なされた人々がその政治的責任を問われることになった。ハイデガーもまた、そのような人物として、市当局から住居と蔵書の引き渡しを要求されるという苦境に立たされ、さらにフランス軍事政府のもとに設置された政治的「浄化委員会」の査問を受けることになった。これがいわゆる「ハイデガー裁判」である。生涯最大の危機に直面したハイデガーは、これに抵抗して、エルフリーデ夫人とともに彼の「弁明」を開始した。「浄化委員会」による査問と「弁明」とは交錯しながら進行して行ったが、ハイデガーが繰り返し行った「弁明」のなかで採用した戦略は、真実を明らかにするという姿勢ではまったくなくて、その正反対のものであった。つまりそれは、自らの政治的過誤を認めるにしても、これをフライブルク大学学長時代のおよそ一年間だけに限定しようとしたほか、さまざまな手段を用いて、時には事実のなかに強弁や虚偽を織り込みながら、ナチズムにたいする自らの関与を最小限のものに見せかけようと試みたばかりか、自らがナチに対する批判者であり、ナチから弾圧を受けた者であるとかえ強調する内容を含んでいた。したがって、ハイデガーの「弁明」は、大学の教職と講義活動の禁止、そして年金の支給停止などの処置を回避しようとするための自己保身にその動機をもつ点で、そしてそのためには意図的な虚偽を述べることも厭わないという不誠実な姿勢で貫かれている点で、あの高貴なソクラテスの「弁明」とは正反対の性格をもつものであった。ソクラテスは、まったくいわれのない裁判で有罪を宣告された後、謝罪と寛大な処置を願い出れば死刑という最悪の結果を回避できることがわかっていたにもかかわらず、自らの死を賭して真実を述べることで「弁明」に代えたのであるが、ハイデガーにはソクラテスのそのような高貴な姿勢は残念ながらみじんも見られないからである。

しかし、ハイデガーのこうした「弁明」は当初は一定の効を奏し、彼に対する「浄化委員会」の所見と処置が寛大なものになるかに見えた。しかし、ハイデガーに対して寛大な処置ですませた場合の政治的意味に強い疑問をいだくフライブルク大学の同僚たちがハイデガー学長時代の歴史的事実を改めて掘り起こし、またハイデガー哲学の影響がフランスに広がり始めたことを憂慮する軍政府の意向も働いて、やがて情勢が急変し、学長時代のハイデガーの政治的責任に対する評価は厳しさを増すことになった。窮地に追い込まれたハイデガーは、大学で講義する権利をもつという条件で、年金付きの名誉教授として退職することを申し出て、妥協しようと試み、またかつての哲学上のライバルであり友人どうしてもあったヤスパーズに一縷の望み

を託するのだが、ハイデガーが学長時代にマックス・ウェーバーの甥にあたるエドゥアルト・バウムガルテンにかんする密告を行った事件を知っていたヤスパースは、ハイデガーにたいする手厳しい評価を含む報告書を「浄化委員会」宛てに送り、ハイデガーの立場は思惑に反してさらに困難になった。こうしたいくつもの紆余曲折を織り込みながら、一九四六年十二月、バーデン州文部大臣からハイデガーに対して、大学における講義活動の無期限停止と職務の停止、明るる年の末をもっての給与の打ち切りという厳しい「判決」が下されたのであった。しかし、給与の支給停止は翌年に解除され、戦後のドイツが政治的に安定した五年後には、先の制裁措置も解除されて、ハイデガーは定年退職扱いの名誉教授として講義活動に復職することができるようになった。

「ハイデガー裁判」が進行するなかでハイデガーが繰り返し行った「弁明」は、その審査記録がすべて公表されているわけではないために、その全貌を知ることは現在は困難であるが、「浄化委員会」の委員でありハイデガー追及の急先鋒であったアドルフ・ランベの報告書、フライブルク市長や「浄化委員会」議長のコンスタンティン・フォン・ディーツェ宛てにハイデガーが送った書簡を始めとするいくつかの文書から、「ハイデガー裁判」のやりとりのなかでハイデガーの「弁明」の基本路線が次第に明確で強固なものになっていったことを知ることができる。そしてこの「弁明」は、「一九三三/三四年の学長職。事実と思想」と題され、いつ書かれたかは不明であり、一九八三年になって初めて公刊された文書、そしてハイデガー存命中の一九六六年に行われ、彼の死後の一九七六年になって初めて公表された『シュピーゲル』誌インタビューなどにおいて、その最終的なかたちをなしたと考えられる。

すでに述べたように、このハイデガーの一連の「弁明」は、自らの政治的危機を免れるという自己保身のために、一定の真実を述べながらもそのなかに虚偽を混在させたり、自らのナチ関与の事実と政治的過去を正当化したり、あるいは都合の悪い事実を隠蔽したりなど、さまざまなきわめて姑息な自己防御のテクニックを行使しているが、ハイデガーのこの戦略はかなり程度成功したといえる。世間一般の受け取り方では、世界的な名声をもつ哲学者が虚偽りを述べるはずもないし、ハイデガーの「弁明」は時代の生き証人の貴重な証言として受け取られ、それは例えばハンナ・アーレントなど、ハイデガーの性向をよく知る彼の弟子筋に当たる人々でさえも、この「弁明」の基本戦略を部分的に受け入れてしまうほどであった。直接に詳しい事情を知る立場にない人々は、なおのことそうであった。こうした事態は、ドイツにおいてさえそうであったのだから、フランスや我が国においてはなおさらのことであった。またそれは、ファリアスやオットの仕事によってハイデガー・ナチズムにかんする論争が新たな次元に入った現在においてもなお、事実を曇らせて論争状況を妨げているが、こうした状況が発生するたえざる源泉がこの「弁明」にほかならないのである。

歴史の生き証人の証言は真実を解明するうえでこのうえなく貴重なものであるが、それはこの証人が真実を語る場合にのみ限られる。真実を隠蔽したり、虚偽を語ったり、真実と虚偽と

がない交ぜになっているような証言は、とうてい歴史の証言としての資格をもちえない。残念ながら、ハイデガーの「弁明」は、さまざまな根拠から見て、とうてい歴史の証人たりうるものではないのである。ハイデガーが世界的な名声をもつ思想家であればこそ、この問題はいっそう重大であり、思想家としての資質と品格もまた大いに問題となるであろう。もしもそうだとすれば、近年のハイデガー・ナチズム研究の成果を踏まえて、ハイデガーの「弁明」を徹底して検証し、彼の叙述のどこまでが真実でどこまでが虚偽なのか、その真実と虚構をあますところなく明らかにすることがどうしても必要であろう。そして、こうした作業こそがこれからのハイデガー・ナチズム研究の新たな出発点とならなければならないであろう。

ところで、世界的な名声をもつハイデガーと二〇世紀最大の蛮行のひとつであったナチズムとがなぜ結びつきえたのかという問題は、ハイデガーが自らナチに関与し、そうすることで、たとえ間接的にはあれ、ナチのホロコーストに関わりをもったということの倫理的責任にかんして、第二次大戦後になってもなお一言も言明していないし、まして一度も公式的に自己批判していないという問題と関連せざるをえない。

例えば、かつてハイデガーの弟子でありナチ政権奪取後アメリカに亡命した哲学者ヘルベルト・マルクーゼは、大戦後の一九四七年八月二八日付でハイデガーに書簡を送って、かつての師がナチの残虐行為について一言も述べていないことを遺憾とし、ハイデガー自身の口からじかに自己批判が述べられることを切望した。マルクーゼにとっては、哲学とナチズムとは両立することはありえないと考えられたからである。彼はハイデガーにこう書いている。「哲学者が政治的な事柄において思い違いをするということはありません—その場合には、哲学者は自らの過ちをはっきりと説明することでしょう。しかし、哲学者というものは、次のような政府について思い違いをするということはありません。それは、幾百万人のユダヤ人を、ただ彼らがユダヤ人であるという理由で殺害した政府、テロルを日常状態とし、精神と自由と真理という概念と実際に結びついていたすべてを血なまぐさいその反対物へと逆転させた政府についてです。」「あなたが、あなたの人格およびあなたの作品とナチズムとの一体化（そして、そうすることで、あなたの哲学の消滅）と戦うことができるのは…あなたがあなたの変化と変身を公的に告知する時だけです。」⁽⁸²⁾

これに対してハイデガーは翌年の一月二〇日付で返答を書いたが、その内容は驚くべきものであった。そのなかで、ハイデガーは例えばこう述べている。「あなたが『幾百万人のユダヤ人を、ただ彼らがユダヤ人であるという理由で殺害した政府、テロルを日常状態とし、精神と自由と真理という概念と実際に結びついていたすべてを血なまぐさいその反対物へと逆転させた政府について』述べている重大で正当な非難にかんして、私はこう付け加えることができるだけです。『ユダヤ人』を『東部地域のドイツ人』に置き換えるべきであって、そうすれば、同じことが連合国のひとつにも当てはまり、違いは、一九四五年以降に起ったすべてのことは全世界に知られているのに、ナチスの血なまぐさいテロルはドイツ民族には事実上秘密にされ

ていたということです。」⁽⁸³⁾つまり、ハイデガーは、自らの倫理的責任について何の言明も行わず、およそ六百万人のユダヤ人がナチによって虐殺されたことと、ドイツ敗戦後に連合軍によって東部地域のドイツ人が移住させられたことが同じ意味を持つのだと公言したばかりか、ナチスのテロ行為は一般国民には秘密にされ、自分もこれを知る立場にはいなかったと強弁したのである。ハイデガーがひとつの民族の生命の大量抹殺と他の民族の強制的移住とを同一次元の問題として論じていることとは、ハイデガーの倫理的感覚の麻痺または倫理的無能を明らかに証明しているし、またナチスのテロ行為が国民の目からは隠されていたと述べているのもまた、意図的な虚偽であることも明らかであろう。例えば、ヴィクトル・クレンペラーは、一九四二年の三月にはアウシュヴィッツが最も恐ろしい収容所であることを聞いていたし、ポーランドのユダヤ人殺害が噂として広まり、ドイツ・ユダヤ人の東部移送が死を意味することも周知のことであったと証言しているからである⁽⁸⁴⁾。また、ヤスパースはユダヤ人の妻ゲルトルトが強制収容所へと連行された場合には二人とも自死を覚悟して、つねに枕元に青酸カリ入りのカプセルをしのばせていたという。このこともまた、当時のユダヤ人たちにとって、強制収容所イコール死を意味することが周知の事実だったことを例示している。

また彼は、戦前の自らの著作を戦後になって再刊したさいに、しばしばまったく恥じることなく自らのナチ時代の国民社会主義にたいする賛辞をそのまま公にしたり、あるいはこれとは反対に、まったく読者に断ることなしにナチとのかかわりを示す文言を削除または修正したりしている。そのなかには、ハイデガーの倫理的責任にたいする無能力を示すと言われても仕方がないような言動が含まれている。ひとつだけ事例をあげよう。

ハイデガーは一九四九年にブレーメンで講演を行い、そのなかで「農業は今や機械化された食料産業であって、その本質においては、ガス室と絶滅収容所における死体の大量生産と同じもの、国々の封鎖と兵糧攻めと同じもの、水素爆弾の大量生産と同じものである」⁽⁸⁵⁾と述べてはばかりところがなかった。ところが、後にこれを公刊するにあたって、何の断りもなしに、この部分をこう改めたのである。「農業は今日機械化された食料産業である。」⁽⁸⁶⁾前者の引用では、驚くべきことに、機械化された農業と絶滅収容所における死体の生産とが同じ意味をもつものとされており、そこには倫理的視点がまったく見られず、ましてたとえ間接的にであれ自らがかつてナチとしてこれにかかわったということにかんする言及が一言もなく、ハイデガーはまったくの傍観者としてふるまっている。後者の引用は、前者が物議をかもし、自分に非難がふりかかってくるであろうことをさすがに意識せざるを得なかったのだが、読者に何の断り書きも示していないのはあまりに誠実さを欠く、と言われても仕方がないであろう。

また、すでに言及したように、一九五三年にハイデガーがナチ時代の思想と雰囲気の色濃く残す『形而上学入門』（一九三五年の講義）を原文のまま再刊した折には、当時まだ学生であったユルゲン・ハーバマスがこれに抗議して、ハイデガーの「ファシスト的知性」を非難し、ハイデガーに疑問を突きつけたという経緯がある。ところが、このハーバマスの疑問に答えて、

クリスティアン・E・レーヴァルターが『形而上学入門』のなかで「国民社会主義」にかんして「この運動の内的真理と偉大さ」と述べている箇所後に丸括弧で付け加えられている「(惑星規模の規定を受けた技術西欧の人間の出会い)」という語句を解釈して、ナチの運動は技術と人間の悲劇的な出会いの徴候として偉大さをもつのだと述べ、これに対して、まったく意外なことに、ハイデガー本人が投書を寄せて、レーヴァルターの解釈に賛意を表明したといういきさつがあった⁽⁸⁷⁾。そのさい、ハイデガーはこの丸括弧の部分が最初の講義原稿のなかにあったと述べ、『シュピーゲル』対談でもこれを繰り返しているのだが、ライナー・マルテンの証言によれば、ハイデガーが『形而上学入門』を刊行したさいに、マルテンを含む協力者がハイデガーに「国民社会主義」の「内的真理と偉大さ」の部分を削除するように提案したのに対して、ハイデガーがこの提案に従わずに、丸括弧の箇所を書き加えたという。つまり、こうした問題でもハイデガーの誠実さが疑われるような事態が生じているのである。

世界的な名声をもつ思想家ハイデガーがこうした経歴の持ち主であるからこそ、彼の思想とナチズムとの間の本質的関係が究明されなければならないのである。自らの政治的過誤について自己批判することによって倫理的責任が果たされている人物にかんしてその過去を断罪する必要はないであろう。しかし、数百万の罪のない人間の虐殺に間接的にかかわったことについて何らの自己批判もせず、倫理的責任を果たしてもいない思想家の場合は事情はまったく別である。ハイデガーの場合には、世界的な哲学者であり、その名声のゆえにいっそうその政治的責任が重大なのであって、その過去を決して等閑に伏すわけにはいかない。その意味で、ハイデガー・ナチズムの研究はどうしても必要なのである。しかし、この研究はたんに一人の思想家の過去をあげつらうことで尽きるのではない。ハイデガーが自ら認めるように、彼が自らの哲学とその思想的枠組みにもとづいて必然的にナチズムに加担したのだとすれば、その思想もまた問題とされなければならない。そして、こうした観点からその思想もまた再評価されなくてはならないであろう。私がハイデガー・ナチ問題を追求する理由もひとえにこのことにある。

(2008年8月4日)

注

- (1) 原佑「ハイデガーへの対応」(『世界の名著・ハイデガー』中央公論社) 53頁。
- (2) フェリアスのこの書が刊行された後、ガダマーが彼を酷評して以来、ハイデガー・ナチズム論争のなかでは、根拠もあげずにフェリアスを不当に低く評価する傾向が散見される。確かに彼の叙述には、証拠の確実性や、晩年のハイデガーの思想を、彼の高名な同郷人であり反ユダヤ主義者でもあったアブラハム・ア・ザンクタ・クララの思想への回帰と解釈するなど、いくつかの難点がないわけではない。しかし、部分的な難点をもって全体的な評価に換えることは、論理学で言う「合成の虚偽」を犯すことになる。全体として見れば、フェリアスの著作の功績は決して否定されるべきではないであろう。
- (3) Vgl. Schneeberger, *Nachlese zu Heidegger*.
- (4) 第二次世界大戦後のフランスにおけるハイデガー受容とハイデガー哲学の評価をめぐる論争については、トム・ロックモアのみふたつの著作が詳細に解説している。Tom Rockmore, *On Heidegger's Nazism and*

- Philosophy, University of California Press, 1992（トム・ロックモア『ハイデガー哲学とナチズム』奥谷・小野・鈴木・横田訳、北海道大学図書刊行会）およびTom Rockmore, Heidegger and French Philosophy, 1995（トム・ロックモア『ハイデガーとフランス哲学』北川東子・仲正昌樹監訳、法政大学出版局）を参照されたい。
- (5) 木田元『ハイデガーの思想』岩波新書、木田元「解説—ハイデガーという難問」（ハイデガー『形而上学入門』[川原栄峰訳]、平凡社）を参照されたい。
 - (6) Vgl. Ettinger, Arendt und Heidegger, Yale Univ. Press, 1995.
 - (7) Farias, Heidegger und der Nationalsozialismus, S. Fischer, S. 2.
 - (8) Vgl. Heidegger Gesamtausgabe Band1. S. 191ff.
 - (9) 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系・ドイツ史』山川出版社、二〇六頁。
 - (10) ハイデガーの『存在と時間』の当初の構想と破棄された後半の内容については、木田元『ハイデッガー『存在と時間』の構築』岩波書店に詳しい。
 - (11) Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, S. 7.
 - (12) Bernd Martin (Hrg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 84.
 - (13) Heidegger, Grundbegriffe der Metaphysik, Gesamtausgabe Band 29/30, S. 243.
 - (14) Ibid., S. 244.
 - (15) Ibid., S. 256.
 - (16) Ibid., S. 247.
 - (17) Ibid., S. 248.
 - (18) Ibid., S. 255.
 - (19) Pöggeler, Den Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau 32, No.1/2, S. 27.
 - (20) Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, Vittorio Klostermann, S. 24.
 - (21) Farias, ibid., S. 181.
 - (22) Vgl. ibid., S. 118ff.
 - (23) Heidegger, Vom Wesen der Wahrheit, Gesamtausgabe Band 34, S. 74.
 - (24) Ibid., S. 91.
 - (25) Ibid., S. 85.
 - (26) Ibid., S. 91.
 - (27) Ibid., S. 92.
 - (28) Ibid., S. 125.
 - (29) Ibid., S. 325.
 - (30) Heidegger, Platons Lehre der Wahrheit, Ibid., S. 91.
 - (31) Eric Weil, Le Cas Heidegger, p.140.
 - (32) Bernd Martin (Hrg.), ibid., S. 84.
 - (33) Heidegger/Jaspers Briefwechsel 1920-1963, Piper, S. 149.
 - (34) Jaspers, Autobiographie, S. 100.
 - (35) Heidegger/Jaspers Briefwechsel 1920-1963, S. 152.
 - (36) Bernd Martin (Hrg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 167.
 - (37) Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, Vittorio Klostermann, 1983, S.9.
 - (38) Ibid., S. 19.
 - (39) Karl Löwith, Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933, J. B. Metzler, S. 33.
 - (40) Pöggeler, Den Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau 32, No.1/2, S. 27.
 - (41) Hugo Ott, Martin Heidegger: Unterwegs zu seiner Biographie, Campus Verlag, S. 229.
 - (42) Farias, Heidegger und der Nationalsozialismus, S. 193.
 - (43) Ibid., S. 200.
 - (44) Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, S. 114.
 - (45) Ibid., S. 120ff.

- (46) Hugo Ott, *ibid.*, S. 239.
- (47) Werner Rügemer, *Philosophische Anthropologie und Epochenkrise*, Pahl-Rugenstein Verlag, S. 100ff. またゲーレンについては奥谷浩一『哲学的人間学の系譜』梓出版社, 205頁以下を参照されたい。
- (48) Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, Gesamtausgabe Band40, S. 40-41.
- (49) *Ibid.*, S. 53.
- (50) *Ibid.*, S. 208.
- (51) Vgl. Habermas, *Heidegger-Werk und Weltanschauung*, in Farias, *ibid.*, S. 30ff.
- (52) Heidegger, *Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit*, Gesamtausgabe Band42, S. 40-41.
- (53) Karl Löwith, *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933*, S. 33.
- (54) Heidegger, *Nietzsche, Der Wille zur Macht als Kunst*, Gesamtausgabe Band43, S. 193.
- (55) *Ibid.*, S. 5.
- (56) Heidegger, *Nietzsche Gesamtausgabe Band 6-2*, S. 44.
- (57) *Ibid.*, S. 44-45.
- (58) Heidegger, *Die Zeit des Weltbildes*, Gesamtausgabe Band5, S. 100.
- (59) Heidegger, *Beiträge der Philosophie*, Gesamtausgabe Band65, S. 41.
- (60) *Ibid.*, S. 117.
- (61) *Ibid.*, S. 117.
- (62) *Ibid.*, S. 493.
- (63) Vgl. Silvio Vietta, *Heideggers Kritik am Nationalsozialismus und an der Technik*, Niemeyer, 1989.
- (64) Heidegger, *Beiträge der Philosophie*, Gesamtausgabe Band65, S. 492.
- (65) Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 24.
- (66) Heidegger, *Beiträge der Philosophie*, Gesamtausgabe Band65, S. 143.
- (67) Heidegger, *Überwindung der Metaphysik, Vorträge und Aufsätze*, Neske, S. 88.
- (68) *Ibid.*, S. 89.
- (69) *Ibid.*, S. 93.
- (70) *Ibid.*, S. 95.
- (71) Heidegger, *Das Rektorat 1933/34*, S. 24.
- (72) Heidegger, *Spiegelgespräch*, *Der Spiegel*, Nr. 23, 1976, S. 209.
- (73) Heidegger, *Hölderlins Hymne "Der Ister"*, Gesamtausgabe Band43, S. 193.
- (74) Heidegger, *Parmenides*, Gesamtausgabe Band54, S. 114.
- (75) Heidegger, *Nietzsches Wort "Gott ist tot"*, Gesamtausgabe Band5, S. 246-247.
- (76) *Ibid.*, S. 247.
- (77) Heidegger, *Heraklit*, Gesamtausgabe Band55, S. 69.
- (78) *Ibid.*, S. 108.
- (79) *Ibid.*, S. 123.
- (80) Heidegger, *Einführung in die Philosophie. Denken und Dichten*, Gesamtausgabe Band50, S. 120.
- (81) *Ibid.*, S. 121.
- (82) Farias, *Heidegger und der Nationalsozialismus*, S. 373.
- (83) *Ibid.*, S. 374.
- (84) ロバート・ジェラテリー『ヒトラーを支持した国民』みすず書房, 一七八頁を参照のこと。
- (85) Wolfgang Schirmacher, *Technik und Gelassenheit: Zeitkritik nach Heidegger*, S. 25.
- (86) Heidegger, *Die Technik und die Kehre*, Neske, S. 14.
- (87) Habermas, *ibid.*, S. 30ff.

追記 本論文は2008年度札幌学院大学研究促進奨励金（研究課題「ハイデガーの技術批判と歴史性の理論」）の補助を受けて執筆されたものである。

Heidegger's Philosophy and National Socialism

OKUYA, Koichi

Abstract

The deep involvement of the world-renowned philosopher, Martin Heidegger, in the cruellest political system of the twentieth century, National Socialism –that is, Nazism– is still now an intense controversy. For the time being, this controversy has continued on into the twenty-first century.

Until now, it has been thought that after Heidegger converted from theology to philosophy, he was only active in the world of academia, and until he joined the Nazi Party soon after been selected the president of the University of Freiburg in April 1933, he had no direct connection to the political world. However, if we alter this viewpoint while looking at “Being and Time”, this 1927 publication that made him famous can be understood as a metaphysical expression of his political ideology and political philosophy. The reason why is that “Being and Time” critically analyzes the loss of individuality and an adventurous spirit in the boring everyday world, and the obliviousness of the average human towards “being”, under the framework of inquiring about the essence of “being” for humans as “Dasein”. Thus, by thoroughly investigating the “anxiety” and “fear” that are the source of a person’s “existence leading towards death”, the “determination” of “essentiality” can be pursued. This analysis clearly shows that he held the political goal of liberation from what he perceived as the oppressive Weimar system of the time. Due to these political implications, in 1933 Heidegger was inspired by the conservative revolutionary movement started by the Nazis as a new “rise to power” and the “dawn of an era”, and was absorbed into it.

From this perspective, this work considers the process by which Heidegger became involved in Nazism after “Being and Time” a natural one of his ideological development, dividing it into four periods (before he was president of the university; his time as university president; after his resignation until Germany’s defeat; after World War II) with the hope of clarifying the degree and characteristics of Heidegger’s relationship with Nazism during each one.

Keywords: National Socialism; nihilism and its overcoming; Criticism of democracy and modern technology; ethical incompetence

(おくや こういち 本学人文学部教授および人文学部長 哲学・倫理学専攻)